



兒童心理學講義

明治
38 9 16
内交

兒童心理學講義目次

●緒論

- 一、兒童心理學の意義、
人間に兒童期の長さ理由、兒童期の分類
- 二、兒童研究史の梗概、
進化論上よりの兒童研究、哲學上よりの兒童研究、醫師の兒童研究、教育上よりの兒童研究
- 三、兒童研究と教育との關係、
教育上に及ぼす一般の利益、實際上の方面——精神疲勞の研究——精神疲勞の實驗法——精神疲勞の狀態、不注意なる兒童——矯正の方法
- 四、兒童研究の方法、

(一) 觀察法、(二) 對話的研究法、(三) 實傳的研究法、(四) 發問的研究法、(五) 實驗的研究法、兒童研究上實際に注意すべき點、操行査定、

●本論

一、感覺及び其教育、

視覺——辨色力——色盲——色の教育、聽覺、觸覺、味覺、嗅覺、溫覺、筋覺、

二、知覺、觀念、觀念連合及び其教育上の注意、

知覺、觀念、知覺の實驗、知覺の教育法、觀念の教育法、觀念の連合——類

似律と接近律——觀念連合の實驗法——反對の連合

三、記憶及び想像、

記憶——記憶の二種類——視覺的記憶と聽覺的記憶、想像、童話——現今世

に行はる、童話の缺點

四、思想及び言語、

概念、判斷、推理——比論——演繹法——歸納法、言語——兒童語

五、感情及び情育の方法、

感情の分類——感情——情緒——情操、兒童感情の特徴、兒童感情の教育法

感情の表出、恐怖——恐怖の原因——臆病、怒、好奇心、愛情及び同情、高

等なる感情——懷疑心——高等なる感情の發達條件

六、意志及び意育の方法、

意志——衝動的運動——反射的運動——本能的運動、感覺的運動——模倣的

運動——思慮的運動、習慣、品性——頑固——爭——意志の激烈——意志の

薄弱、氣質——多血質——膽汁質——粘液質——神經質、參考書、結辭

児童心理學講義

松本孝次郎講述

緒論

児童心理學の意義

一 児童心理學の意義 児童心理學と云ふものはどういふ學問であるかと申しましたなら、極簡單に云つて見れば、児童期に於ける精神の状態を研究する學問であります。此の児童期と申しますのは、日本の語で兒童といふのには適當せないやうであるが、母の胎内に宿りたる以後、青年期の終り迄の間を申しますのであります。つまり一人前の成人となる迄を児童期と申すのであります。人間の場合に取りて考ふるに一人前になるのは他の動物に比して餘程晚いもので、雞や犬や猫などは一人前になるのはよほど早くあります。人類にありては一人前に

緒論

なるのに随分手間取れるから、この兒童期に於ては精神の状態は様々に變ります即ち幼少の間より小學校、中學校といふ間には大層精神状態が異なるものである。

人間の兒童期の長き理由

そこで人間の兒童期の長いには理由がある、所謂兒童期の長いといふのは即ち一人前の人間に成るのには夫れだけ長い間の準備を要するといふことである、換言すれば教育期が長いと云ふことである、従つて夫れだけ他の動物よりも高等なる發達が出来るといふことである、同じ一人前といふても他動物と人間とは大に其の程度が異つて居るので餘程大なる處の發達をする見込があるといふ意味であります、又兒童期の長い人間は一人前となりて後に社會に活動する年限が長い様になつて居る、種々の動物につきて比較するに其の動物の完全なるものとなるのに要する時間の長いものは、従つて其活動する時期も長く又早熟するものは其の活動期も短くあります。

蟬は朝生れて晩に死するといひますが、此れ等は働く時間が短いだけ準備の時間が短いのである、同じ人間の中でも野蠻人は早く一人前となるからまた早く老衰するといふわけであります、だから準備期即ち成熟期の長いのはそれだけ活動期の長いのを意味しますから、人間にありて兒童期が他動物より長いと云ふのは誠に喜ぶべき事でありませう、而して人間中にも高等なる人間となればなるほど其の準備期が長いのであります。

兒童期の中でも兩親の世話になる時間の長いのは、人間の精神の發達とは大關係があります、人間は他の動物に比すると此の年限が長いだけ夫れだけ道德心が深くある、即ち親子の道德的關係の大小が子の親に養はるゝ時間と餘程大關係があります、故に實際の親に離れて他の人に養はるゝものは道德心が薄い傾きがある、であるから親に長く養はるゝことは欣ぶべきことでありまして親たるものも當然之を養はねばならぬ義務を有して居るものである、此の兒童期の長いのは人間に對してはよほど關係のあるものであります。

兒童期の
區分
一七歳より
七歳までの
特徴

まづ一人前の人間になりかゝる迄の間を大体三つに分けて云ふて見ますと

其の第一期は大凡一歳よりして七歳頃迄の間で、この間に於て人間の心の有様は大体如何なる特色あるかを一言すると、此の間に於ける精神は自分の身体の周囲のものより大に支配せられてその影響を受けて居るので、自分の考よりするといふ事よりも周囲のものによりて動さるゝといふ事が多いのである、そして自分の感覺機を動かして外界の現象を知らうとする傾向が頗る鋭いものである、自分で物の道理を考へるとか思慮を回らすとかいふ思想は至つて乏しく、たゞ物事を考へましても吾々の云ふ思想でなく、想像に似て居るので、確實なる事實に乏しく、経験上より来るよりも想像を以て特別なる性質の知識として存するのであります、此の時期の兒童の感情に激烈にして、その上利己的である、即ち吾儘で單に自分の都合をはかるばかりである、そして其の感情の激烈なるだけ其の繼續時間は短くある、又此の時代に於ては意志(自分自ら考へて決断して實行せうとする念)の働きはまことに

乏しく殆んど缺けて居る、此れが此の時期の大体の傾向である

七歳頃より
十四歳
までの
特徴

第二期なる七歳頃より十四歳頃迄に於きましては、一体の精神作用は外界より影響を受くるのみならず、自分自身、考へて進んで活動する様になる、花につきていふて見ると前の時期では花の爲めに心を奪はれて見るといふ風であつたのが、この期に於ては自分の方から進んで見ようといふ風になり、自分で感覺機關を用ひまして、得ました處の經驗を記憶によつて之を心に貯蓄して置きます、さうして自分で物の道理を考へる力も進んでまいり、ならひし事もならひしまし、記憶するのみならず、新工夫を考へ出す力が盛になつて来る、又前時期と違つて徒らに想像にのみ馳せることが減じて来るし空想が次第に去つて着實な方になつて来る、感情は自分で支配する風があらはれて来て、吾儘も少しづつ、改まつて来るし、感情も此の期には餘程複雑になつてきます、意志は此の時大分進みて已自ら進んでやるといふ事が大に盛になつて來ます、

十四歳より二十一歳頃までの特徴

第三期なる十四歳より二十一歳迄の間は、もう精神はすっかり自分の精神となつて来て外界の爲に容易に動かされぬようになり、そして物を記憶するといつても、めちやくに理窟なしに記憶することなく、要點を摘みて記憶する様になる。感情は自分の智識で支配し不道理は抑へるといふやうになる、意志の働きは一層つく、吾は吾たれといふ様に獨立心進みて他人の指圖なくして働らくようになる、此の時機の終りて兒童期が終了するので、これから社會に出て、一人前の人となつて活動する様になつて来るのである。

兒童研究史の梗概

一 兒童研究史の梗概

此の部分はあまり教育者に必要なし、故に極大体に止めます、兒童を研究するといふ考は如何にして起りしかといふに、昔より子供は愛らしいものであるといふ考は何れの國にもあつたが、子供は愛らしいものであるといふ事と、兒童は研究すべきものであるといふ考とは別なものである、故に此の兒童を研究するといふ考は極近頃の事である、兒童を研究するといふ事は此は進化論

進化論の兒童研究

と大に關係のあることで、英國の學者ダウイン、進化論を説いて萬物は皆下等より上等に進むもので、人類も動物から進化したるものであると考へた、従つて成人よりも小供は動物に近いものでなければならぬといふ考が起りまして其の關係を書けば、動物より大人の如くである、かく人類が動物より進化したものなれば小兒は、より多く動物に似るか否かを研究せねばならぬ、ところが大層小兒は動物と類似點を有して居る、例へば小兒は手足の指の廣がり共に大きくて、手足の間、其の働さに區別がありません、さるを養育中吾々は足を働らかせないから、其の結果働くことがないやうになるのである、又小兒は其の握力が強くあつて足趾も手指も共に強く猿の如く木につかまるものとよく似て居る、其の他動物と似る點はいろいろあるが、小兒に對する毒藥の分量も、大人ならば少しも感ぜざる程の分量でも小兒は動物と共によく感ずるものであるといふ點も、此の兩者の似たる點である、
只今申したる進化論を確めるための兒童研究は英國の博物學者間に起れるものであ

哲學上の研究

ります。

醫師の兒童研究

獨乙の方では十八世紀の終り迄は、あまり経験を經んじて理論を重んじた結果、哲學者ライデマンは普通の哲學者の云ふ如く理窟一方に偏してはいけないので是非経験によらねばならぬといひ出して、人間は其の生れしむの子供は如何程の智識を有するかを檢して、人間の智識の價值を定めねばならぬといふた、これは哲學上の問題を定むる爲に起つたのである、續いて十九世紀の始め頃に、醫師が兒童を研究しました、醫師は小兒と大人とは異なるものであるといひ出して、いろ／＼しらべたのであるが、其の主なる人はブライエールといふ人である。

教育上の兒童研究

教育上で兒童を研究せうといふたのは亞米利加である、故に著書中にも米國人の手になれるものが多くあります、其の學者中で最も教育的方面に力を注ぎたるは、現存のスタンレー・ホールといふ人である、斯の如き有機であるから教育者として、この種の研究をするには斯のホールの著書を参考せねばならぬ、實に吾國の兒童研究

兒童研究と教育との關係

の始りは確に此のホールに自ふ所が多いのであります。

三 兒童研究と教育との關係 此の問題に就いては種々の方面より話さるゝが、始めに教育上一般に利益ある二三の點を取りて述べ、次に二三の實例につきて話させよう、

教育上に及ぶ一般の利益

先づ教育上に及ぶ一般の利益として

第一、兒童の研究は小學教育、中學教育、大學及他の高等なる學校といふもの、完全なる連絡をなさしむるものである、

第二、教育者は兒童の研究によりて兒童に對して更に新たなる觀察をなすことが出来る、例へて言はゞ植物學を知らぬものが植物を見ると、よく之を知れるものが見ると大層異なつて居るやうに、兒童研究の出來て居る人はその出來て居ないものよりはよほど便利なることは云ふ迄もない、

第三、若し教師が兒童に就きて十分の知識を有して居るならば、自己の兒童に及

ぼしたる影響もよくわかり、従つて兒童に對して行く方法もよくわかり、己の職に熱心となることが出来る、又これによりて兒童に對する同情も大層強くなります、

第四、若し教育者が兒童に就きて知識を有したらば、教育の方法につき出来得るだけ便利なる方法を考ふることが出来るし、又他人の方法につきても批評的にこれを視ることが出来ます、即ち自分の教授なり、他人の教授なりについて、よく其の根據を正しく説明して、よく理窟に適つて居るか、どうかといふことを明らかにするからして、取捨し改良することが出来るのであります、

實際上の
方面
の精神疲勞
の研究

以上の諸點は皆教育者が大に利益を得べき點である、これより實際上の方面より兩者の關係を説きませう、してこれから説くのは重に私自身の研究である、一の例として

學校生徒の精神疲勞の度につき研究した結果を話ませう、
學校生徒は精神活動の後には確かに疲勞するものにて活動すれば活動するほど疲れます、そこで疲勞といふこと、倦怠といふこと、は意味が異つて居ります、疲勞は、

はたらかしたる結果勢力がなくなることである、又倦怠は尙勢力はあるけれどもあきたとか、いやだからせないの、爲さうとすればいくらも出来るのである、さて此の疲勞するわけは腦を組織する細胞は精神が活動すると、漸次に其の組織が崩れて出来る、即ち細胞は原形質より成りて内に核を含めるものなるが之を働かせると、原形質も核も次第に其の性質を變じ、次第に其の内部に所々空所を生じます、そして其の空所には毒ある瓦斯を生じ、遂には原形質も核もなくなつてしまふのである、さてしばらく休むと、新らたなる血液の來たるものを吸収して恢復をするのである、去り乍ら疲勞が若しも極度以上に達すると遂には恢復すべからざるやうになつて病氣に罹る様になります。

そこで人間が生きて居る間精神を使へば疲勞することは當然のことではあるが、茲に教育上心配すべきことは、その疲勞の再び恢復せざる迄に至らしめないといふこととである、さてこれは屢々休息することより外に仕方はありません、それで、小學校

精神疲勞
實驗法

及中學校の學科は其の種類によりて如何程兒童の腦を疲勞せしむるかを檢することが必要である、よりて余は高等師範學校の附屬小學の男生全附屬中學生女子高等師範の附屬小學の女生同高等女學校生等につきて研究したのである、そしてまづ最初に取りし方法は獨逸のグリースバッハと云ふ人の試驗法で研究しました、其の手段は知覺計を用ひます、此の機械はかく或は廣く或は狭く擴げるといふやうに二つの針の尖の中間の距離を大きくしたり、小さくしたり自由に出來て、其の竿に「ミリメートル」で分度を盛つてあります、そこで人間の皮膚には一つ妙な性質があるもので、前の機械を或る距離で持つて觸れて見ると、二ヶ所ふれて居るにかゝらず、或る場合には一ヶ所觸れて居るとしか思はれぬものである、舌端や指端などは辨別力が鋭いから随分近くてもわかるが、其他の部分は鋭敏でありませぬ、そしてあまり鋭敏でもなく又遲鈍でもない其の中間の感じをする部分は耳の前、頬の邊りである、そこで如何にして研究するかと申しますと、朝早く生徒のまだ腦を使はぬ

精神疲勞
實驗の結
果

時、即ち授業前に於て彼の器械を其の頬に當て、いかなる距離に於て始めて二點と感覺する様になるかを檢して置いて、其の日の精神の活動量として次に其の第一時が修身ならば其の授業の終はるや否や、又はかつて見る此の時は多少辨別力が鈍くなつて居るから、前より距離が大きくても一つと感ずるから漸次其距離を大にして二點と感覺するに至りて止める、そこで前後の距離の差を見て精神疲勞の度を示すのである、此の様に種々の學科につき、各々の時間にわたりて研究するのである、此の器械は醫者は知覺計といふて居りますが心理學者の方では譯語はないから余は檢觸機と譯して居るが原名はエーリッセンワメーターといふのであります、それで兒童の性質によりて非常の差異がありました、神經質の小兒は非常に鋭いか、又は非常に鈍いかである、又睡眠不足の小兒は普通のものに比してよほど辨別力が鈍くあります、一般に云ふと午前と午後とは餘程異なつて居りました、午前は鋭くして、午後は鈍いのであります、今其の距離を申しますと、先づ通常の小供でいふ

と十二ミリメートルから十五ミリメートルの間で辨別力がありますが、一時間の後になりますと一乃至三ミリメートルを増加し、甚しいものは五ミリメートル迄に至るがあります、又學科の好き嫌によりて大層異なります、算術の時には一体に疲れます、又眞の優等生は疲かれませぬ、

精神疲勞の狀態

兒童が精神疲勞に陥つた時に如何なる有様を呈するかをいはんに、それは程度によりて異なる上、又種々の事にあらはれるものであります、先づ眠むる時の状態につき述べるに、齒ざしりをする事、寐言を云ふ事、非常に轉輾反側すること、夢をたび／＼見ること、寐ぼける事、又は寐らんとして寐られぬ事など、これ等は皆疲勞の結果であります、若も斯の如き事あらば、學校以外に於ける仕事を檢して、或は家庭に於ける仕事が兒童にすぐるときはよろしくやめねばならぬ、又食物が不足して居る場合にも、早く疲勞するものであるからこれも又注意せなければならぬ、顔色青く身体矮少なるは營養分の不足より來るものが多いが、是の種の疲

勞は貧民に多い、實に此の點より見ると貧民は可愛想なものである、随分出し得る勢力を有し乍ら食物の不足の爲めに出すことの出來ないものといはねばならぬ、

次に兒童を直接に見た時の状態を述べませう、まづ頭は正しくせないで下方を向いて居る、又額には多くの皺をよせて居る、但老者の皺とは別である、眼の下陰の脹れて居ること、瞳孔の廣く開き過ぐる事、又平生の様子は何か一つのものを注意せず、ぼんやりとして目を働らかせて居ることなどである、

一時あまりに疲れると口の周圍に薄い黄色の輪がかゝれてゐる、郊外運動のあとや、運動會等の時に注意するときつとわかります、さればよく是の點に鑑みて其の程度を考へねばならぬ、

甚しく疲勞すると、手を平に前方へ伸ばさしめて見ると、左右同一の高さに伸ばしむること能はず、大抵左を下にしたり、上にしたりするものである、

激しい精神疲勞に陥りて居るものは、目をつぶらして手を高く舉げしめるとすぐ

仆れる状態になるもので、これは身体の釣合を保たれぬからである、若しも精神疲労が繼續して遂に恢復する事が出来ぬやうになれば、所謂精神衰弱となる、又往々精神病となるものもある、疲労が進むと兎に物事が氣になつていけない、又同じ事を思はないやうにと思つても思ひ出て、ならぬ、かゝる時には用心せねばならぬ、疲労は始にはあゝ疲れたといつてわかるが、終には疲れたといふとがわからないやうになるものであるから、人が若しも忠告したならばこれを用るねばならぬ、故に兒童につきてもよく観察して勉強の度合、睡眠、食物等の事に就いても調査して充分に家庭に向て注意せねばならぬ、

不注意なる兒童

不注意なる兒童

注意が散漫する兒童があります、これは幼稚園時代からわかります、かゝる兒童には瘦せて居るものもあり、外觀のよろしきものもあります、其の様子は教師の談話する時に或は外見をなし、他のものに話しかけたり徒らをしてたりする、唱歌の時などにも前のもの、肩をうち、隣席のもの、足をついたり、或

不注意なる兒童を矯正する方法

は左にかたより右にかたより、前へ傾いたりして一向にしましなし、又歩行をするにも草履を充分に指間にはめないで、足先の方ではやく走りあるくもので、これ等の様子で其の不注意な事がすぐわかります。それで此れ等の不注意の兒童には少しかまうて見ると快潤で、わる氣のないものが多くあります、これを矯正するには原因を検してかゝらねばならぬ、この原因に種々あるが遺傳のものもあり、習慣よりなつて居るものもあるが、一般に云ふと身体の健康上と、精神の方面とから來るといはねばならぬ、身体の健否は食物、睡眠、運動の三つから來るのであつて是の點からの矯正は家庭のなすべき點であります、教育者自身として其の不注意を矯正する簡單なる一例を挙げませう、先づ櫛の如き堅木にて、三角柱をつくり、長さは鯨尺で七寸位となし、三角の一片長さ一寸位のものにて十分なり、そして其の頂に溝をつける、勿論其の穴の深さもの、浅ささものいろいろ作り置くをよしとする、さて不注意の兒童をば毎日の稽古のあい間、又は放課後十五分開殘して、鉛筆を持ち

て其の溝を左より右に向つてあとをつけさせるのである、始めは注意せんとするも鉛筆がすべり落ちるから溝の深きを用ゐさせて、熟練するに従うて浅い溝のものを、其の時間は五分より十五分間位繼續させ、是非共監督せねばならぬ、さてこれが上手になれば中版の洋野紙を取り此の野上を前の如く、色鉛筆にて撫でしめる、そしてはづれぬやうにするを、よろしとする、大体此の練習は早く効能のあらはるゝものでなく、三ヶ月位やらねばならぬ、尙時々不注意は何事も成効のできぬといふことをよくいつて聞かせてやらねばならぬ、私が一人の兒童に二年位此の練習をやつて、今では中學校へすゝんで普通の生徒となりましたものがあります、兎に角教師の氣根が大事といはねばならぬ、

教師は不注意なる兒童を見て之を矯正すると共に、尙不注意のよつて来る所の原因をも考へなければならぬ、即ち教室内の温度の適否即ちあまり寒かつたり熱かつたりする時には注意が出来ぬ、又あまり一定の姿勢を永く保持すると同一の筋肉に

緊張を與ふるのみで、血液の循環がよろしくない爲めに注意をすることが出来なくなる、故に尋常一年の如きは時間内に時々立たしめるといふことが必要であります、又學校に於て教授に要する教具の外持ち來ることはならないと命令する事も必要である、何ぜといふに、それらを注意せないと大に兒童の注意力を散漫せしむるものであるからこの事もよく注意せねばならぬ、兎に角注意は教育上最も必要なるものであるから、習慣とならざる如き些々たる不注意であると思つても、決してそれを忽にしてはなりません、

兒童研究の方法

四 兒童研究の方法

兒童を研究するに種々の方法がありますが、まづ其の方法を五つに大別して話します、

觀察法

第一の方法を觀察法と申しておきます、此の方法は兒童に向つて、今御前を研究するぞといはないで何とはなしに兒童を觀察して其の兒童の缺點、癖、長所等を靜に自然状態そのままに觀察して研究の材料をとり、自分の目的を達する方法であり

對話的研究法

ます

第二の方法は對話的研究法といふのである、そのやり方は、どうも兒童はいくらか話をして見なければ其の精神はわからぬといふことが屢々あるが、一寸話して見ると其の答ふる時の言葉遣や、其の態度、容子等によりて種々の事を發見するものである、例へば或る兒童は速に答へるとか、或る兒童は遅く答へ、又速に答へて間違ふものと、間違ぬものとあるとか、又遅くあり乍ら間違ふとか、遅いかはりに間違はぬとかの別がある、この答の仕方によりて其の兒童の觀念聯合の具合、思想發展の遲速、精神作用の敏否などを知ることが出来る、又其の答をなす身体的狀態も種々ちがふものでありまして、例へば運動的兒童にありては必ず手を動かすか、足を動かすかせないと答へ得ないものがある、學校の話し方の時間に於て手を組んで話したり、袴を撫で、話したりするものがあつて、若しそれを止めさせると話をなし得ないもの、あるのは諸君の知つて居る所でありませう、つまり其の兒童の如何なる

實傳的研究法

種類に屬するかを知るには、是非對話しつゝ其の性質を研究せねばならぬ、

第三は實傳的研究と申して置ませう、時間の上に於ては最も長くかゝつて講究すべきもので、兒童の生れた時よりして其の發達するに従つて觀察し乍ら、種々の方法を用ゐて研究し、其の實傳を作つてゆくといふ風に、永き間其の發達の有様をしらべるといふ方法であります、

發問的研究法

第四は發問的研究法と申します、これは對話的研究と異つて居るので、或る問題を定めて置いて、之を黑板とか、又は印刷にして置いて筆記で以つて其の答をなさせて、これらの答を集めて研究するもので、よく世に行れて居る善と考へること悪と思へることなどを書かしむる方法はこれである、此方法は場合によりて必要であります、或る兒童は對話の場合に十分答へ得ないが、筆答ならば随分答へるといふことがありて此の方法は案外兒童の實際を知り得るものである、

實驗的研究法

第五は實驗的研究法と申します、つまり或る器械を使用し、之を利用して兒童を

研究する方法であります、例へば昨日御覽に入れた検觸機を使用するが如き方法であつて、米國の文部省あたりでは三年前より年々重なる學校に於て體格検査を行ふと同様に、これらの事をも調査せしめて其の報告を集めて講究しつゝ居るのであります、吾邦でも漸次進んで行くことを行ふ様になるのでありませう、今一例を擧ぐるに兒童の發達の程度が異なると、偶然に向ふの方のある窓から、赤き旗を一寸あらはして見ると、其の思想の發達したるものは早く之を認め、其の發達しないものは認めないものである、よしこれは認めるとしても遅く認めます、さて其の認め方の遲速によりて其の兒童の發達の如何を検するのであるが、其の遲速といふものは大層僅かの差異であるから之を普通の時計で計ることは出来ないから、精密に計算する爲めに一秒の千分の一を單位としたる時計を用ゐて其の時間の差異を検するのであります、かく其の精神作用の遲速によりて旗の發見をするのに差異があるのを検するといふ様の方法で以つて、次第に其の年齢の進むに従つて、其の精神

状態の異なる有様を研究するといふことにつきて、米國の文部省は一定の試験の方法を定めつゝあるといふが將來吾日本でもさうなるであらうと思ふのであります、兒童は年齢何歳位のものは大凡普通に如何程迄に發達すべきものなるかを見出して、之を基本として發達の後れて居るものには注意を加へて發育せしめ、又其の或る部分のみの發達鋭敏なるか否やを知つて、其の兒童將來の職業を決定してやつたがよからう、例へば耳の發達せるものは音楽家たるに適するし、手指の發達の敏活なるものは技術家たるに適するが如きものである、

此の五つの方法は通常吾々の取る方法であるが、これは學問上より分類したもので實際に於ては、以上の五つのものを混用して其の研究の目的を達するのである、これから實際の研究上注意すべき點を擧げませう、

昔しから申す語に心と体とは離すべからざる關係のあるもので、心の働らき如何は必ず身体の様子にあらはれる、そこで研究すべき兒童をばまづ明るい場所に出し

兒童研究
上實際の
注意すべ
き點

て先づ頭を見るのである。

頭を見るには其の頂より左右に分つ如く想像し、そして其の釣合が平均を得て居るか否や注意するのである、さて精神の虚弱なものは其の左右は平均を得て居らないものである、これは前頭も後頭も共に同様である、次は顔である顔も左右平均を得て居るものでなければ、やはり健全でない、まづ平均を得て居らないで高等教育を受け得るものもあるが、此等のものは何處かに缺點があるに相違ありません、よし本人になくとも其の血統中に必ず不健全なものがあるに相違ないと思ひます、又額に皺のよるものがあるがこれも必ず虚弱である、彼の眉の間にむやみに皺を寄せらる児童を検すると、此等の児童の境遇は必ず不幸なるものが多く、繼母の手に育つものが多くあります、次に眼である、其の眼の働らき方か一方に向はないて、ぼんやりとして居るではないかどうかを見ねばならぬ、その目の動き方の不活潑なものは、精神の不活潑を顯はして居るものであります、實物教授の時小學校の二三年位

の児童の内には實物の動く様に目の動かない児童があります、この事は時々一年位の児童に向つては教師たるものは特に試みて、其の動かないものをしらべてみるのみならず、動かし得るやうに練習させねばならぬ、これは特に遊戯的に練習するをよろしいと思ふ、其の方法には種々あるも最も單簡なものは鏡を用ゐて光線を天井裏などに反射して、其の反映を轉じ乍ら發見せしむるといふ様な事をする、大層効果があります、兎に角眼の動かないものなどは精神の作用も確實にならないから、かゝるものがあつたならばこの時に早く矯正しなければ不利益である、要するに教師は尋常一年位の児童に向つては、其の精神を強めるといふ事に注意が肝要であるが、此の點は幼稚園などでは随分注意して居るから、こゝより尋常一年に來るものはよろしきも、然らざるものにありては殊に此の點を注意すべきものであると思ふ、次に鼻である、鼻は香を臭ぐ嗅ものであるればこの働らきさへあればよろしい、併し乍ら或る種類の小兒は何時迄も鼻を垂します、これは多くは悪習慣から來るもの

であつて若しも小さき時から、垂らして居る度毎に清潔にせよと、たねす注意すると途には改まるも、注意しない爲めに改まらないのがあつたが、時として悪習慣でないので外に腦の悪い爲めに青い濃いものを垂らすものがあります。これらの兒童があつたならば頭痛はせないかといふ事を聞き合せて、其のよつて來る所の病根を治療しなければならぬ。

今一つは實際は鼻がわるいのにそれを發見されないで居るのがある。余曾て文部省の依頼を受けて取り調べをした結果、かゝる種類が少なくないのを發見しました。鼻の悪るいものは疳癩持て教師に反抗したり、泣き出すと二時間もつけて居るといふことがある。そこでどんな風なのが鼻がわるいかといふと、鼻のつけ根の處の平たいものは怪しいものであるから注意せねばならぬ。一体其の部の骨は五六歳迄に發育するものがあるが、其の時に發育せなくて尙七八歳迄も放棄して治療しなかつたならば、終生治療せないものである。爲めに一生涯物の香臭を辨せず疳癩

持て終るものがある。故に五六七八歳迄即ち家庭時代幼稚園時代尋常一年の始め頃に特に氣をつけて發育せなくて形状がかたまらない中に是非直してれかねばならぬ。

口についていへば口腔の廣いものは健全である。口腔の狭きものは咽喉病に罹り易いものである。

齒の形状に就いて話します。精神の遲鈍なるものには齒の形状の不規則のものが多し。例へば人間の前齒は平たきものである。これは人工で食物を調理するから、漸次進化して美的になつたものである。然るに遲鈍なるものには、其の齒の形が圓く太きものを有するものや、其の端が鋸齒状をなすものなど屢々あります。又齒並も必要であつて精神状態の不健全なるものは不規則であります。腦病や神経病のものにも齒並の不規則のものが多し。

耳の形状によりて其の精神状態を知ることが出来る。耳の小に過ぎるも、大に過ぎ

るも共に不健全である、精神の不健全なるものには外耳にあるべき溝のないものがある、又外耳中のへこみたる空所の面積の狭きもの、又は突出物などありて不規則なるものは皆不健全である、そして其の不規則なるものゝ種類はなかく澤山で、凡そ二十種位ある、要するに素人にも不規則と見ゆる耳のものは注意せねばならぬ、尙又猿と同一の耳を有するものがある、余の取り調らべた所によると三百人の中に二人ありました、この猿耳のある児童は必ず血統上に於て疑はしいものに限る、女子高等師範の附屬の高等一年生に、教師が優等生であるといふものに猿耳の生徒がおります、此の生徒は授業時間にはよほど注意して額の赤くなる位迄注意して居りますから、随分疲勞する様である、是の生徒は教師の言によるに尋常一年より四年迄の間に於て學びし本字を盡く書かした時、一字も誤らないで書いたものは是の生徒のみであつたといつて居る、されど余はこの児童は健全体でなくて、一種の變態で即ち異狀に屬する一種の天才であると思ふ、それであるから永く運命を持続する

か否やは疑問である、又昨日申せし如く手を前方に出さしめて平でないものは、筋肉及精神に於て何か不健全なる点があるものに相違ありませぬ、又歩行させて見ることにも必要である、是の際肩の部分左右に傾くものは不健全なるものであるから十分注意を加へねばならぬ、又神經の虚弱なるものは筋肉がふるへるものである、鉛筆などを持つ時に其のささが常にふるふものである、ろれて十分にふるへるかふるへぬかわからぬものがあつたならば、其の児童をして手を伸ばさしめて自己の手の上にあげさせて見ると、其のふるふの如何は確にみる事が出来る、以上のことは教師がよく心得置きて毎朝必ず一度全児童を一見して何か平素と異ならぬかを見て置かねばならぬ、英の倫敦である注意深い學校にありては、毎朝教室の入口に教師が立つて一々児童の挨拶を受け乍ら其の様子を見るさうであります、それで今日では學級を設けて教授するといふのは一の便宜であるから、宜しく教師たるものは學級を扱ふと共に個々の児童を扱ふといふことを忘れてはならぬ、只今申したことは

操行査定

大体兒童の研究上の注意であつて、普通の教育家諸君にもよくわかることだけを申し上げたのであります。だが今二つの注意は、操行査定が兒童研究上につきて如何なる點に注意すべきかを話すのであります。

- 1、品性、
- 2、學力、
- 3、才幹、
- 4、言語、
- 5、動作、
- 6、氣質、
- 7、學科及び技能に關する興味、

以上の七項目によりて現今の教師諸君は實際以上に利用する様、體格検査と相待ちて其の兒童の人物を査定するならば効果があるであらう。

本論

感覺及び其教育

一 感覺及び其教育　まづ最初に御話致しまするのが目の感覺即ち視覺と云ひます。感覺中にも必要なものと、あまり必要でないものとありますが、かゝる短期の講習にありては必要なものについて委しく話をなし、比較的 unnecessary のものについては省略して御話するのは至當であるかと思ひます。

視覺

視覺

母の胎内にある時には視覺はないらしい、生れました時にも始まりにはやはり物が見えない、何ぜかと云ふと目の中の組織が光線を受くる様になつて居らぬからである、それであるから始めに明るい所へ出すことはよろしくない、若し無理に出すと目を閉じて顔をしかめるもので害がある、彼の斜視といふのは幼兒のまだ完全に發達しない時にある一方からのみ光線の來る位置に小兒を絶えず眠らせたる結果であらう。

幼児が始めて物が見ゆる場合には如何なる風であるかと云ふことは、自己の経験より云ふことは出来ないが、併し今より數年前に横濱に、父は支那人で母は日本人なる所謂間の子の女兒に服部エンと云ふものがあつて、これが生來目が見えなんだのが十五歳に至り始めて醫療で見ゆるやうになりました、此の時私も他の人々達とわざわざ同所へ研究のため行きまして、それは水晶体を不透明ならしむる様な物質があつた爲め見えなんだので、所謂ソコヒ即ち先天的白内障に罹つて居つたのである、此れが十五歳の時始めて見えただのであるから、此の見える場合は幼児の見え初と同じ事であらうと考へられます、そこで始めて見えただ時には施術醫の顔であつて、それが凹凸などはなく全く平面のやうに見えた、そして其室内各所が遠いのか近いのか一向に距離についてはわからないので、何か動く物を見るとまるで来て自分にうちかゝる様に思つた、即ち往來で人力車が來るとき自己にうちかゝるかと思つた、又眼をあけると立つて居ることが出来ないで、目をふさぐと始めて立たる、これは

目をあけると外界との釣合を取られぬからである、それで嬰兒も多分此れに似て居るのであらう、即ち始めは盲目同様であるものが漸々見ゆるやうになるので、始めて見るものは立体などを見分けることが出来ないのである、

さて兒童は學齡に達する頃までは遠視眼的のものであるが、六七歳頃迄には漸次普通となるもので、學齡の終はる頃より近視眼となるものが多くあります、それで兒童の目の悪くなるのは其の原因は光線の不十分な處で物を見たり、又こまかすぎるものや、印刷の不分明なものを見たり、又は其の身体の位置のわるいなどはみなその原因である、右の如き諸原因は普通の人の知つて居る所であるが、尙外に冬など頸巻をかたくすると、物を見るときに頸を自由に廻して眼を適當の位置に保つことを怠る結果からして目をわるくすることがあります、其の他熱病のあとなどで眼のわるくなるのもある、これは精力の回復せない中に多く物を見たり、又寐ながら斜に見たりするからである、尙喫咽とか營養分の不足等よりも屢々目のわるくなること

がある、學校に於ても始めて入學した時には其の歸宅後に頭痛を起すことなきかを注意せねばならぬ、頭痛は腦より來るものもあるが、かゝる際のもの多くは眼を使ひ過ぎた結果、眼の働きを支配する六本の筋肉が疲勞する結果から來るのが多いのであるから、かゝる場合には注意して過度に眼筋を使はせない様にせなければならぬ。

辨色力

辨色力

兒童は始めから色の辨別が出来るかどうかといふに、一歳半から二歳半までは出来ないものである、併し光輝は辨別するものである、光輝につきては白はよくかゝやくといふので、黒は殆んど光輝をもたぬもので、鼠は其の間である、さて辨色力のない小兒がなぜ赤い色を喜ぶのであるかといふに、いろ／＼の色には夫々光輝を含む分量に差異があつて、兒童は光輝を含める度の多いのを喜ぶといふだけである、とに角二歳以前は辨色力があるかなきかは不分明であるが、二歳以後は確に辨色が出来、まゝ、兒童の中には色盲といふものがある、赤の色盲と

色盲

いふのは生れながら赤だけが見えないので、まるで緑が、つて見えて、正しく辨別することが出来ないものである、凡べての色の色盲といふのは萬物皆同一色で見ゆるもので、恰も寫真を見ると同じやうに光輝のみが見ゆるものである、私の知つて居る或る師範學校長の小兒にて十二歳になる男兒がある、其の父より赤新聞(萬朝報)を取つて來れと命ぜらるゝも、常に他の新聞を取つて來るので、恠しみていろ／＼試験した結果、赤の色盲たることがわかつたのである、彼は長く小學校にありしも遂に其の色盲たることは發見せられなかつたのです、色盲には赤の色盲、緑の色盲、黄の色の色盲、全色盲などがある、今より二十年程以前に米國の或る處にて汽車の信號旗を取り扱ふものに、緑の色盲があつて、緑のかはり赤旗を出して汽車を衝突せしめた事があつた、これが裁判所に於ける取り調らべの結果、色盲たる事が明になりこれよりこれ等の會社が人物を雇ふ際には辨色力を検査することゝなつたといふ事である、それ西洋には色盲のものが多く、東洋人には色盲のものが少ない、又

同じ東洋人の中でも日本人よりも支那人に色盲が少ない、これは徴兵検査の結果より認められたのであるが大に研究すべき問題である、色盲は生れ乍らものは治癒せな
いけれども、青年などの喫煙より起つた如き一時的のものは治癒します、

色の教育

色 兒童の教育上色の名を色其のものと十分に連絡せしむることが必要である、即ち赤といふ言葉を教ふると共に其の赤に相當したる色を示すのがよろしい、そして其の示す時どの様な色を示すを可とするかといふに、こゝに於て始めて標準色を示すとが必要である、標準色は太陽の光線を三角稜玻璃で分解した時あらはれたる色と同一の色紙を用ひるのがよろしい、此の色紙は米國のマサチューセツ州のスプリングフィールド、コンバニリーの專賣に屬するが吾が大坂にて出来るのも可なりよろしい様である、色の語の中で吾日本人の間違つて居るのは緑と青との區別がつかないことである、

色の美

色の美

色の美といふ事について學校で教育する必要がある、色の美といふ

ものは標準色にないもので、すこし薄くある色即ち所謂中間の色が美しいものであるから教育上此の中間の色を好まされる様に導くことが必要である、又配合上の事も大に關係があるもので、同じ色でも配合の具合でよほどひきたつものとひきたぬものがありますから、よくこの配合のことをならせる必要があります、英國にては婦人が小兒をつれてあるく時に色の配合のよろしい、服装をした人に逢ふことがあると、其の兒童に其れを觀察せしめつゝ其の美なることを教ふるといふ風がある、これらはよき母親の注意にして教育上喜ぶべきことであると考へられるのである、

一體日本の學校には色の事について注意を缺いて居ることが多いので、音楽なれば風琴などを聞かすとかいろいろ其の音の調和について注意する工夫はあるが、眼の色の調和については何等の注意をもせないといふ傾きがあるから將來此の點について大に注意してほしいものである、

聴覚

聴覚も母の胎内にある間は全くないもので、生れ始めにもないらしいのである、嬰兒は大なる音に逢へば身体をふるはすが、此れは空氣の振動が皮膚に刺激を興へてふるふやうであつて決して聴覚でない様であります一体耳は普通人が考へるよりも不完全な耳を持つて居るものが多いもので、即ち近視眼よりも耳のわるいものが多いやうである、學校に於ても目よりも耳のわるいものが多いあります、小學校に於ても成績の悪いものがあつたならば、其の聴覚に注意せねばならぬ、聴覚の不充分なものは其の口の周圍の筋肉にしまりが無いものである、さて小兒は耳がわるいと間違つて返事したり又返事をせなかつたりすることがある、此のやうな時に無やみに叱りつけたりすると、兒童はだん／＼意地悪くなつたり、疳癩持となつたりするものであるから、注意してまづ耳を治療せねばならぬ、學校などでもかゝる兒童を馬鹿くとか意地悪くなど、片つけらるゝことがあるもので、まことに不幸なものであるが注意せねばならぬ、耳を保護する一つの方法として

鼻を拭ふことに注意させるとよろしい、それは鼻を拭ふ時に兩方を一時にかむと大に鼓膜を害するものであるから、一方づゝ鼻をかませるといふ事が肝要である、獨逸等に於て初年級にありては鼻の拭ひ方を修身の時に教へる事になつて居る所がある、

教師の音

教師があまり大きな聲のみで教授すると大に兒童の聴覺力を鈍くせしむるものである、熱心なる教師はあまり大きな聲を出すのが爲めに却つて兒童の聴覺力を害するものであります、かの海岸の漁夫等は常に怒濤などになれて居る爲めに、こまかな音は聞きわけることが出来ないのを見ても、かゝる教師は注意しなければならぬ、獨乙の耳の學者に「コレルマン」といふ人があつて獨乙の小學校で體格検査をなした結果、教師の高聲の爲めに兒童の聴覺力を鈍くせしめて居るといふ事を發見しました、又英國にては自然に此の點の注意が進んで居る、なぜかといふに英國では紳士を造るといふ考から、人品を重んじて上品な風がある所からして、小學校の教師などに

ありても自から音聲に關する研究をなして必要なる程度に於ける高聲に注意して居つて、若しも一層注意を引かうとせうとする時には、却て低聲で以つて一段低めて話し、よく注意を引くこととして居ります。それで高聲で注意を惹くのは兒童を受動的に注意させるので、低聲に話すとき兒童は活動的に注意するものである、この點は吾日本の熱心なる教師諸君の大に注意せらるべき點であらうと思ふのです、教師の聲は其の教授の感化と大に關係があるもので、美聲を有する人は大に感化力が強いものであるが、所謂「キーキー」聲などいふ調子外づれの聲で修身教授をしてもあまり効果がないといふ事はよく皆さんの知つて居らるゝ處であるから、教師たるものは聲の練習をするといふ事がなかゝ必要な事である、唱歌教授も樂器によるよりも教師自身の聲によるがよろしいと思ふ、此の教へ方の上乗といふべきは始めは教師の歌ふ事によりて教へ、次に樂器を用ひて其の調和を助くるといふ方法で、かゝることは大に進歩した教授である、

唱歌教授

世には兒童を叱る時に耳のあたりを打つて叱る父兄がある、これはよろしくない東京に於てある中學校の体操教師が生徒が抵抗したといつて其の耳のあたりを打つて叱りしに忽ちにして其顔の半面が腫れ上つたといふ椿事がありました、兎に角腦と耳とは大關係があるから兒童の耳をひつばつたり、其のあたりをうつたりしてはなりませぬ、又兒童はふざける時によく平面の處即ち腰板とか塀などへ押しつけるものであるが、これはなかゝ危険なもので目や耳は共に平面の處で押さるゝのが一番で危険である、

又耳へいろゝの物を入たり、虫がはいつたりするものである、曾て御手玉の袋の中の小豆が耳にはひつたのを知らずしていぢくりたる爲に次第に奥へはひたものがある、物が耳へ入りしときに素人が出さうとして尙々奥へ入れて耳を損するといふことはよくあることであるから、かゝる場合には直ぐに醫者に依頼することよろしい、又虫の入りたる時に棒など用ふると益々侵入するものであるから、暗室へ入れて光

線て誘ひ出すとよろしいが、蟲の種類によりては砂糖などを外耳にぬりて誘ひ出すをよろしとするのもあります。

觸覺

皮膚で物に觸れました感覺を云ふのであります。普通の心理學を見ますと壓覺と申すのがありますが、觸覺と壓覺と其司どる機關が全く別なりといふ説もあります。吾々の筋肉は肉眼で見ると扁平の様であれども、鏡で見ると非常の凸凹があつて蛙の背の疣みたやうになつて居る。其の中へ神經が來て居て其の末端に何とも觸ると感ずるのであります。其の觸覺と壓覺とは其の感ずる所の細胞が夫々異なるのであると云ふ説と、又二者同じと云ふ説とありますが今日の解剖學上では其の細胞組織の内部がよくわからないのであるから、軽く壓する場合を觸覺と考へ、強く壓する場合を壓覺と考へてよからうと思ひます。私の申しまする觸覺といふ語の中には壓覺をも含んで居るものとして御聞きになることを願ひます。勿論諸君が普通の心理學書を見て壓覺とか觸覺とかいふ文字に接した場合には、其の意味は前

説の何れから來て居るのか判断して讀まるゝがよからう。さて觸覺は胎内にある時より有して居るものである。小兒は胎内にて或は胎壁と觸れたり、又は液体等より刺激を受くことも屢々あるから従つて生れ落ちたる時より、大層觸覺は發達して居ります。一例をいひますれば生れて程たゞぬ兒童の目の睫毛の部へ、葦の如き細管によりて僅に息氣を吹きかけると其れに應じて眼蓋が著るしく運動します。頬の如きもやはり刺激に應ずる作用がある。目や耳は前にも述べし如く生れて後に發達するものであるが、觸覺は生れながらにして強いものである。若しもかくなかつた日には嬰兒は乳房につながる事が出來ない位なものであつて、滿十ヶ月で生れない所謂月足らずのものでも皆此の觸覺を有し乍ら生れます。この觸覺と云ふものは始終用ひて居る間には絶えず發達するもので、目あきよりも盲目はよほどよけに用ふるから其の必要上よりよく發達するものである。

學校に於て觸覺が鋭敏であるか、なさかを檢するの種々の布片を集め置いて其の

性質を判断せしむると鋭敏になります、此の觸覺は練習さへすれば發達するものがありますから前の如き練習は時間の少なくして割合に有効なる感覺教育といつてよからう、現在銀行にて賈造紙幣を見わくるに肉眼で六かしいものは暗室にて撫て、見るとよくわかるさうである、紙幣の用紙は秘密にしてあるから印刷の賈造は出来るが、紙は到底出来ない、故に見てはわからないでも、觸れて見るとわかる、さうして兒童は觸覺の鋭敏なもので少し練習すると直ちに此見わけをするやうになるのである、それであるから觸覺を練習して鋭敏にするといふ事は教育上甚だ必要なこととあります、

味覺

味覺

これも生れた時にはありません、勿論胎内では營養分は體を通じて來るのであるから、味覺を働かせないのである、若も嬰兒に鹽などの様なものを與へると顔をしかめるが、砂糖をやれば平氣であるといふがこれは直接に神經を刺激する反射運動の様であります、とに角味覺は暫くせねば發達せないものである、兒童

には始め糖分が必要であつて自然に平氣でたべ、鹽からいものは之を嫌ふ従つて之を與ふれば有害なものである、

兒童に食物の好嫌がある、これは親のしつけ方がわるかつた爲であつて、同じ食物をのみ食せしめた結果で、つまり最初の教育法を誤つたものである、ある小兒を牛乳で育てたが、もう牛乳を飲まないといふ様になつた、これは牛乳と糖分との交ぜ方を誤つて始に多く砂糖をませたに起因したものに相違ないのである、かゝる時に乳母を求めると大層よろしいが、世の中には随分かゝる際に腹をへらしたなら牛乳を飲むだらうと考へる人が多いのである、それは甚だよくありません、かくすると畢竟營養不足で死に致さしむるものである、吾人の味覺は人間の食ふ物ならば如何なるものでも食ふべき性質であるべきに、好嫌が出來て來るといふのは決して兒童の悪いのではなく、全く親たるもの、不注意によるものである、

學校に於ては此の味覺を教育する機會に乏しい、また中等以上の學校などでは化學

や礦物學などに於て其の香味を検すると云ふ事があるも、普通學校ではかゝる機會がないから當然家庭の仕事である、こゝに一に注意すべきは學校に於ける食事である、食慾の起る時にはまづいものも美味と感じ、食慾の起らぬ時には美味の品でも大層まづいものである、さて食慾の起るのは授業が終わつてから、五分間位過ぎて脳の恢復した後である、うれてあるから授業後すぐ食事させるのはいけない、又冬日の如き寒き時には能く考へねばならぬ、歐米では冬日には適當なる温度のものを學校から給して實費を徴収する處もある、であるから成るべく冬日には餘り冷むない様な設備を要するのである、一体飯にはあまり變はりがないのであるから、飯だけは學校で給し副食物のみを持ち來させることなどは、この手始としてよくあらうと思はれます、殊に家庭から學校へ始めて遷つる時には、よほど辨當については家庭と連絡せねばならぬ、

嗅覺

嗅覺

この感覺も普通教育などでは教育する機會の乏しいわけであるが、こ

れも生れた時にはないもので、あとより次第に發達するものである
嗅覺は臭香を辨別し、酒茶などよしあしを鑑する等に必要なるものであるが、教育上之を練習する機會は少ないのである、又一つには吾々の知識に於ける關係が少ないといふ事から、自ら忽かせにしてあるのである、併し昔の文學者の文章を見ると其の完全なる人物は凡ての感覺を利用して言ひ顯はし、面白く形容して居るから、よほど立派な出來であるといはねばならぬ、何しろ凡ての感覺を平均にはたらかせなければ、不完全な人間たるを免れないわけであるから、此の凡ての感覺を十分に發達せしむることに注意せねばならぬ、
或る生徒につき實驗せる結果によると、悪い香氣をかゝせる時には記憶力悪しく、善い香氣を嗅がせる時には記憶力強いといふ事であつた、さればかゝる點にも注意することが必要であります、

溫覺

溫覺

皮膚を以て温度の如何を感じる感覺である、此れは母の胎内から持つ

て居る、これは母の胎内には温度を有し、時により異なることがあるからこの温度があるに相違ありませぬ、温度は大人と異なり小児には餘程鋭敏である、普通心理學の研究によると皮膚中に温を感じる細胞と、冷を感じる細胞とあつて兩細胞は相まじりて全皮膚中に散在して居るものであると、若し皆さんが鉛筆の尖頭を湯の中にて温めて之を拭ひて皮膚にあて、見ると、之をあつく感ずる所と感ぜぬ所とある、又鉛筆を雪などにつけて冷してするも前と同様である、之を更に簡単に試験せうと思へば、「ふりき」で直經五分位の獨樂の如きものを造りて、其の中に温湯若くは冷水を入れて皮膚中の寒點と温點とを探つて見ると、兩者を感じる細胞は別々であることがわかる、

物理學者は寒暖計の度が異つて居るので寒暖を生ずるもの、つまり寒暖とは程度の差であるとするが、心理學者はさうは見ないで大に性質上の差異であると云うて居るが、とにかく温度は小児は大人よりも鋭敏であるが、併し此の練習も與へる機會

は少ない、併し教室内に寒暖計を備へてある以上は之を單に教師の参考とするばかりでなく、兒童に對して兒童の感ずる具合と、寒暖計とを比較させ今日と明日との温度を比較させるといふ様にすると大層温度の教育が出来るであらう、此等は温度練習上實際に必要なことと思はるのであります、

筋 覺

筋覺に就いて種々話すべき事あるもこの場合には僅に話すことにしまして、他は別章に譲ります、筋肉は幼時即ち二三歳頃迄は鈍いものでない、つまり鉄で物を切るといふ事は幼稚園でも小學校へうつる際でなければ十分に出来るのを見てもよくわかるのである、筋覺は筋肉の緊張したり、緩んだりする時に起るもので、運動させる時に起る感覺である、此れが発達すると其の緊張の度で此の事をするには此れだけの力が要するといふことがわかる、例へば習字の如き裁縫の如き、皆筋肉緊張の工合がすぐわかる、併しそれには餘程鋭鈍の差があつて優等生、劣等生によりて大に差異あるもので、概して劣等は鈍いものである、彼の運動會に方り、

合圖後早く出るものと、遅く出るものとある、其の運動を始めることの遅いものは、注意をすることは他のものと同一であるも、脳の命令を受けて働く事が遅いのである、であるからかゝる兒童に對して注意せねばならぬ、

習字科は筋肉運動の練習として大層効果の多いもので、本邦に於ける毛筆は吾日本人の筋肉運動の最大要具であつて、曲線、直線を高妙にあらはさしむるものである、米國のエール大學で、日本の毛筆を用ひて或る學生に對し筋肉運動に於ける効果を試験しつゝあるといふことである、吾邦の將來に於ても筋肉練習は單に手工科のみに着眼しないで、圖書と相俟つて習字科を大に利用すると云ふことが大切である、

又指の筋肉の鋭鈍を知るには指にて成るべく早く机上などを叩かせて見るか、又は指だけで早く十の字をかゝせる練習をさせるとよくあります、今其の實驗の結果をあげて見ると、

一横線を早く引かしむるのは

七秒で二十位

×字を早く書かしむるのは

五秒で十一位

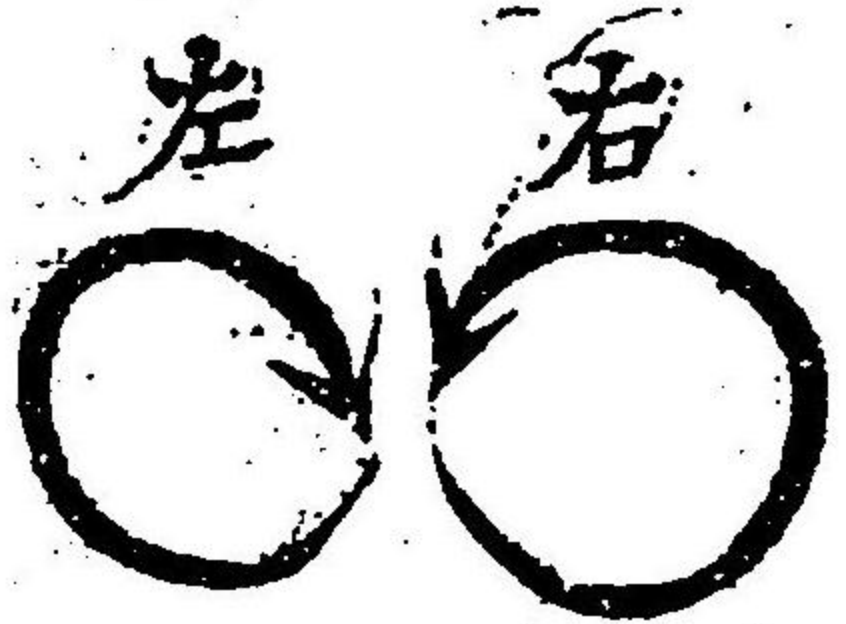
早くたゞくことは

五秒で四十位

練習すると右の如く早くなる、腦は斯の如き練習をすると非常に發達するものであるが、若しもかゝる練習を缺くと腦が發達しない、若も腦が發達しないと精神も發達しない、そこで腦の内には感覺作用に屬する機關と筋肉運動の作用を主とする機關との別があるが、筋肉を働かせなくては其の發達がとまる、すると腦は不完全となつてしまうのである、殊に筋肉は其發達の時機を失すると發達しないで發育期を終ふる憂があるから、此が運動を忽にしてはならぬ、家庭や幼稚園では折角此の練習をさせねばならぬ、從來の教育は筋肉をはたらかせることを、おろそかにしたから今後は單に學科のみならず、遊戯等の上にも大に奨勵して適當なる時機を失はぬやうに練習してほしい、そして從來の遊戯中には筋肉を練習するものは澤山あり

交叉教育

ます、序にはんに歐米の教育に於ても機會あらば左右の手を同様に練習せうとして居ります。一体腦は左右の兩半球より成つて居るが腦と体との關係は、体の右は腦の左と相關係し、体の左は腦の右と關係して居ります。さて右手でアと云ふ字を練習すると左手の筋肉にも自然に形響を與へるものである。さて如何なる風に影響を及ぼすかと云ふに右にてアとかくと、左手でアと云ふ様に影響するもので、若し右手のア字を鏡で移すと左に移つる文字と同じ様な風に影響します。之を交叉教育 CROSS-EDNDATION と云ふのであります。左手でアと書くとき、若しアとかくと劣らざる字を書くことあるは、實際について明らかなきことあります。



歐米の今日のやり方では左と右とを一所に働らかすことにとめて居ります。即ち右と左と同時に圓を描くとすれば圖の如く各反對に引かせる様にするので、これは腦の發育上よほどよろしくある。

今日の体操科は生理的に出來て居るから左右同時に同一の動作をさせるが、他の學科にはかくの如き注意をして居るのではありません。そこで近來書にも此の事を利用して腦の發育を完全にせうといふ様に注意しだして、鳥花魚等皆左右兩手に描かじめねばならぬ、なぜといふのに若しも單に左手に自然の影響をさせるのでは腦の發育には關係が少いて効果も少なくあるから、是非左右同時の運動をさせることが必要である、尚併せて茲に云ふて置きますが、右利きと左利きとは如何にして起るかと言ふに種々の説がありますが、或る處まで説明が出来るが、ある處よりは説明することが出来ないものである、今日の學者が正當と認むる處の説の結論をいふて見ると、身体の中にて右の部分には血液多く循環し、左の部分は血液の循環は少なくあるから、従つて左右の發育の度が違ふから右利きとなるのである、併しなぜ右の方へ血液が多く循環するかと云ふ理窟は説明が出來ないのである、そこで馬も猿も右きであるといふ事實あるから動物を通じて右ききの理があるかも知れない、又

云ふて見ると現在の人間は進化の途中で、將來右手ばかり動かすと左手がなくなるも知れぬ又却つて將來左きゝとなつて右手がなくなるかも知れない、例へば吾々人類は眼三つあつた時代もあつたらしい證據がある即ち腦にある松葉腺は眼の退化したる痕跡である云ふことは學者の説である、されば將來進むと一つ目となる時代が来るかも知れない、要するに進化の途中で將來の事はわからないが、左手も練習すると右と同じ様になります、スタンレー・ホールは左手を練習して右手と同じやうに手紙を書いて居る、これは右きゝと云ふのは小兒の時よりの習慣ではなからうかと疑い出して、其の説を主張する爲めに左手を練習したものである、かく練習によりては左右何れもさくやうになるが併し右きゝには何か生理上の理由があるらしいのである、

一、知覺、觀念、觀念連合及び其教育上の注意

知覺

知覺

今知覺と云ふ語の意義を話します、例を取りて申しますと、今私が巻

煙草を一本持つて居ると考へると之を鼻で嗅げは香が知れるし、之を吸へば其の味がわかるし、又之に觸るれば剛柔滑澤がわかる、つまり現在そこにある巻煙草はどんなものかと云ふ姿を吾々の心にて認める事が出来る即ち吾々が感覺機關を用ゐて物体の姿を寫すこと恰も寫眞機で外界の物影を捕へる如きものである、かくの如く外界の物体に關して其の姿を心中に認める心象を知覺と云ひます、そして知覺に就きて皆さん忘れてならぬことは、實物が必ず各自の前になくはならぬ、即ち知覺は現在起つて居る心象である、決して自分で考へたるものではなく、刺激が現存して居つて、時を云へば現在でなくてはならぬ、今私に就いて申せば皆さんは皆さんの感覺機關で私を知覺して居るのである、

人間は其物体に關する經驗のなき間には、一々感覺機關を動かして知覺をつくるものであるが、さり乍ら精神が漸次進んで來ると一々感覺に訴へないで自分で考へて補ふと云ふ事がある、かゝる知覺は時には間違ふ事があるが、併し吾々は發達する

と皆かくして居るのである、かく精神が発達した時と、せぬ時とによりて大に違ふとは云ふが、要するに單に其の心象の作り方が異つて居るだけで外界の物体を寫すと云ふ事は決して違つては居らぬのであります、

觀念

前に卷煙草の例につき申しましたが今も之につきて述べませう、前の卷煙草をわきへやつて其の姿を心中に浮べて見ることが出来る、これは今日でなくとも明日でも明後日でも必要に應じて思ひ浮べる事が出来る即ち現在そこになくとも其の形狀を思ひ浮べることが出来るものであつて之を觀念と申します、諸君は私の姿に就いて知覺して居らるゝのであるが、休憩時間に私があちらへ行つても私の姿を浮べて觀ることが出来る、これは諸君の觀念である要するに知覺のなき觀念はないものである、今知覺、觀念の兩者を比較するに知覺は現在のもの、觀念は過去の經驗を思ひ起して出來たものである、故に知覺は明瞭であるが、觀念は明瞭の度は知覺には及びませぬ、第三に知覺の場合には精神が他へ移つると云ふことは少

知覺と觀
念との區
別

ないが、觀念は兎角他事へ移り易いものである、さて此の觀念といふ語の意味を應用して種々に使つて居ります、思想とか、考だとか、意見等の意味に用ひ、又時には概念といふものゝ代に使ふものもあります、かく種々の意味に適用せられて居るが本來の意味に於ては必ず個々の實物に對するものであります、

知覺、觀念本來の意味は前に述べたことと明かであらう、兒童にとりて考ふるに初めには不精密な知覺をつくり易く、従つて觀念も不精密で時々誤ることがある、そして優等なる兒童は劣等なる兒童よりも精密なる知覺觀念を作つて居る、大人にありても其の知覺觀念の精粗の度は大層相違のあるもので、博覽會へ赴き同一の物を見て來りしも、兩者決して同一の觀念を得ては來ないものである、

さて實驗心理學上にて知覺を練習するには種々の方法があるが、始めに數多の小石を撒布して一瞬間にいくつ見ゆるかを教へさせるやうに、遊び乍ら練習するとよろしいと思ふ、

さて觀念に就いて申しますと、兒童心理學の研究されてより小學入學の際に有する兒童觀念の分量を調査するやうになつた、これヘルバート氏の唱ふる教授の原理、新たに授くる材料は舊觀念と連絡あるものを取れと云ふことよりして入學當時の觀念界を研究することが起つたのである、そしてこの研究に二箇の目的がある、

一は尋常一學年の教授材料と連絡する爲めに、必要なる觀念の種類につきて之を有するか否やを檢するものである、今一つは小兒の有するあらゆるの觀念を檢せむとするものである、純正心理學ならば後者はよろしいけれども教育上にありては前者にてよろしいのである、然らば兒童については如何に研究するかといは、例へば犬につき知つて居るか、見たことありや、誰かにつき聞きたることありやと對話法によりて舊觀念を知り、更に其の答につき反問し、以て觀念の内容につき其の精密の度を知るのである、此の方法は極めて有益なるもので、一學年を受持つ人は此

の方法によりて兒童の舊觀念を確めなければ教授することが出来ぬ、これは毎年研究すべきものであつて年々によつて異なるものである、さて此場合に如何なる種類を選ぶべきかは教授上に屬するが故に今は畧します

尙茲に一言したいのは私が研究しました結果として、尋常一年生などに就いて考へますのに、彼等は善惡につき有する觀念を見ますと、之は惡なりと云ふ事は澤山に知つて居りますけれども、此のやうな事は善なりと云ふ事はあまり知らぬ、これは吾邦の家庭ではいけないと云ふ命令を與へる事が多くて、これに代るべきかゝる事をせよと云ふ即ち善を知らせる事がなく、所謂消極的に教育する結果であらうと思ふから、これからの教育上の方針は成るべく、積極的方針で善をすゝめるやうにしたいものである、

觀念の内容の如何なるものであると云ふ事を檢するは大切な事である、一俤小兒の有せる觀念と云ふものは物体の或部分の性質のみをとりて持つて居るものである、

例へば鼻に就きて如何なる概念を有するかと云ふと、鼻はかむものですと思つて居たり、又は鼻は涙の出る道具であると思つたりして居るもので、重もに其の物体のはたらきを多く認めて居ります、土瓶は湯を入れるものであると云ふなどもやはりこれである。

又其の物体を形づくる物質を認めて概念として居るのもあつて、右の二者は一般の小兒に認められて居るものであるが、又其の物体の大きさ、色合、位置などのやうなものも小兒の概念を形づくることあるものなれども、これらは有すると有せないとあります。

小兒に其の概念を述べさせると、其の概念を組み立て、居る一々の性質を分析してあげて来るものであるから、思想なき間には綴り方が出来ない、さて綴り方を進歩させるのには其の概念を殖やすより外なし、即ち知覺を十分に作らしむるより仕方がない、そこで思想の豊富なるものは多くの知覺を有して居るものである、かく考

へると、成るべく實物に觸れさせる機会を多くせねばならぬ、然るに多くの教師は手を觸る、可らずと屢々兒童に向つて云ふが、これは甚だよろしくない、故にこの命令は餘程考へて出さねばならぬ、又教師は實物を指示する時には兒童の位置と實物の位置とにつきて、餘程考へなくてはならぬ、例へば此のこつぷを見るにつけても皆さんの位置によりて其の心象が異なるものであるから、多數の兒童をして同一の心象を作らしめん爲めには、實物の位置をかへて見せなければならぬ、殊に幼稚な兒童には位置が異なると、全く別物として經驗することがある、であるから教育者はかゝることまかしき點にもよく注意せねばならぬ、或る書を巧みに書く小兒が、馬などをかくに如何なる點が困難かとの問に對して、馬の首と尾と同じ所にある時は一番困難であると云つた、是は立体的となるから困難なのである、要するに同一の實物も位置によりて知覺をつくるのに難易がある、であるから教師は此の點に注意せねばならぬ。

さて明瞭なる観念をつくらむには、十分に知覺に注意せねばならぬ、又知覺は感覺の鋭鈍に關するものである、以上の三者は相互に關係するからまづ十分に感覺を練習せねばならぬ、

観念連合

観念連合、 観念連合といふのは或る一つの觀念が他の觀念を思ひ出さうとする傾向がある、例へばかりに一人の太郎の事を思ひ出すと、其の時其の友人の次郎や其の所持の品を思ひ出すものである、之を観念連合といふのであります、そこで兒童の發達せない時には重もに観念連合と云ふ事によつて物事を處置して居ることが多いものである、例へば小兒に帽子を見せると直ぐ外出せうとするし、又靴を見せるも同様で直ぐ外出を思ひ、遊歩場を思つたりする、これは何時も其の靴をはくと外に出て又其の遊歩場に行きて遊ぶことからこれを思ひ出すのである、兒童の思想の大部分は此の觀念の連合によりて支配せられて居るもので、兒童が時として大人も及ばぬ程巧みに理窟に適つた事を云ふことあるが、これは大人のやうに考へて

云ふのではなく、觀念の連合によつて云ふのであります、例へば晴の日に小兒に向つて表で遊べよといふ時に出ることを好まない時には、雨がふりさうだとか、道がわるいなど云つてこぼむことがあるが、此は理窟から來るのでなくて唯觀念連合より來たるものに過ぎないのである、兒童の巧みなるは此の類が多くあるのである、

接近連合
と類似連合

観念連合を二つに大別してあるのが通例である、即ち一は接近連合で一は類似連合である、

接近連合といふのは時間及び空間に於ける雙方を意味するもので、今朝早く経験したことを今頃経験したこと、につき、何れか一方を思ふと他をも思ひ出すと云ふ様に連合する、又私の講義の休み中寫眞を見たことがあると後講義を思ひ出すと寫眞の事をも思ひ出すはこれ時間上の接近連合の一種である、又空間上の接近連合と云ふのは此のテーパールの側に何時でも此の水注あるときまつて居ると云ふと、此のテ

「ブルを思ひ出すと同時に水注を思ひ出すこれ接近連合の一つである。類似連合とは同種類のもの、甲の馬より乙の馬、池月より磨墨を思ひ出すと云ふ様に、似よりの物を思ひ出すものである、又櫻の花より桃の花を思ひ出すと云ふ様に性質の似よりて居るものは連合し易いものである、此の連合を類似連合と云ふのであります。

兒童にとりては、接近連合が早くあらはれます、類似連合は其の類似點を辨別する力を要するから一段の進歩したものでなければこの連合をすることが出来ない、それであるから兒童は其の幼少の時には専ら接近連合を行ふもので精神發達に従つて類似連合が増して來るのである、彼の一種の滑稽を理解すると云ふ事は類似連合が餘程發達せないと之を解することが出来ないで、小學校の終り頃より青年期にあらざればわからないものである、世に謎と云ふものありて例へば馬鹿者の頭とかけると云ふ問題に對し其の答として破ぶれ障子と答へる、さて其の解はよりたくなると

觀念の連
合の實驗

云ふのである、かく類似連合を發見した時に始めて興味を持つのである、かゝる樂しみは青年期にあらざればやらない所である、

觀念連合と云ふ事を學校兒童に就いて研究せうとするには簡單なる方法で出来る、まづ物の名前筆、墨、犬、猫などいふ様なもの十位選び置いて、生徒に紙と鉛筆とを持たせさせて、さてそれにつき種々思ひ出すことをはやく書かしめる、たとへば私が筆と云ふた時に何でもそれにつきて思ひ出した事を直ぐかくので、若も遅くなれば、かくなと豫じめよく約束して置いて其の答を集めて大体の傾向を纏めて研究するのである、余は高等師範の附屬小學校、中學校、高等女學校の兒童につきて研究した結果によると、男女により觀念連合の傾向が大に異なつて居ります、男子は器械があると自分の目的に就き思ひつくことが強い、例へば舟につきては軍人となりたいと連合する如し、然るに女子は目的を發表すると云ふことは甚だ少ない、蓋し女子は目的を有する事も少なく、よし目的を有するとしても發表するを好まぬ

男女に
り觀念連
合に區別
あること

傾向があるらしい、

又男は社會上の出來事につき興味を有して居ると云ふ事は、其の觀念連合によりて屢々發見せられる、例へば軍艦につきて日清戦争や、日露關係を思ひだす如くあるが、女子は社會上の事に就いて思ひ出すものは殆んどない位である、これも自然と男女の興味の異なつて居ると云ふ事をあらはして居るが、これは女子今日の地位が男子の如く社會の出來事に興味を持つ様になつて居らぬのが其の原因であつて、誠に悲しむべき事であるから將來大に改良を企圖せなくてはなるまい、

又歴史上の觀念を取りて其の連合を見ると、男子は他の歴史上の觀念を思ひ出すもの多くあるが、女子は其の事に就き感情を連合して判断するが如き傾向がある、例へば楠木正成に就きて男子は湊川とか、千原城とかを思ひ出し、女子はいらいとか忠義とかといふ事を思ひ出すものが多い、これは男女歴史上の興味の區別である、

反對の連
合をなす
児童

又觀念連合の際に方りて、或るものは成るべく反對の事を思ひ出すものがある、悲しみに對して喜を思ひ出し、惡に對し善、進むと止まる、右と左、寒と暑といふ如く、徹頭徹尾反對を云ひ表はすもの百人中に一人は必ずあります、かゝる児童は大抵不幸なる境遇にあるものにして、繼母とか繼父とか、或は非常に貧窮にして毎日の事に支へる様なものであつて、ひがみ根性があるものであるといふ事をあらはして居るので、境遇と児童との關係の大なることはよくこれでわかります、

今一つ云ふべき事は尋常一學年位ならば児童の觀念界狭くして、大抵思ひ出すことは皆同じ様であつて、男女の區別も全くありません、それが二學年位になると漸次異なつて來て、觀念界も豊富になり従つて男女の間も異なる様になる、これによつて見ると觀念連合は教育上大なる關係のあることであるから、大にこれが研究をすゝめると云ふ事は教育上參考の價值があることである、

三、記憶及び想像

記憶

記憶、記憶と申しまするのは曾て経験したる事を一時思ひ出さずに置き、暫らくしてからそれを思ひ起して此の事は確に前に経験したに相違ないと思ふことを記憶と云ふのであります。そこで同じことを認めても確にかうであると決定しなければ記憶と云はれないのである。こゝに學者の間に二つの異つた説がある、一方の學者の説によると、前の経験と毫も異なることなきものでなければ記憶でないといふのである。又一の學者は前のと合つて居らうが異なつて居らうが、かまはないて自分でかうであるといふことを思ひて認めさへすれば記憶である、間違つて居るならば記憶が間違つたと云ふだけである、之を學問上で云へば確實なる復起を記憶と云ふ學者と單に再認と云ふ事さへあれば間違つて居るとも、合つて居るとも記憶であるといふとの二説あるのである、要するに確實なる復起をやつて再認する場合には最も確かなる記憶と云ふことが出来る、併し乍ら確實なる復起は甚だ困難にして精密に確實と云ふ事は得難いのであります。

記憶の意義につきての二説

記憶の二種類

記憶を二種類に分つことが出来ます、一を機械的記憶と云ひます。又一を論理的記憶といふのであります、機械的記憶と云ふのは十分にわけがわからなくても其のまゝ覚ゆるので「幼時の唱歌を覚ゆるが如きものである」論理的記憶と云ふのは其のわけを理解して要點を摘み、順序を立て、記憶するものである「小學校生徒の終り迄は、寧ろ機械的記憶をよくするもので、此の終り位より青年の時に論理的記憶によるやうになるものである、機械的記憶は其のまゝ覚ゆるものであるから、勞力が多くて、困難なるものであるか、天然兒童は此の力に富んで居る、又男女に就いて見るに女子は機械的記憶に富み、男子は論理的記憶に富んで居ります、又兒童は早い内には機械的記憶に富み、後には論理的記憶に富むやうになるものである、又兒童によりて視覚的記憶に長して居るものと聴覚的記憶に長して居るものがあります、併し第二に屬するものは少ないものである、視覚的記憶のものは目で見たものをよく覚ゆるが、聴覚的記憶のものは耳で聞くことをよく覚ゆる、此を簡單な

視覚的記憶と聴覚的記憶

ことと考へると、今人からヴァイオリンと云ふ事を聞く時に、先づ其の事の心にあらはれるのに、音が考へらるゝか、又其形が考へらるゝか、それで以て何れの方の記憶が強いかと云ふ事が自分では決定が出来る、されども此れを精密にはかるには次の如き方法によるをよろしいと思ふ、先づ數字を横に並べる、—ONES—其の數字は六つより十二位迄排列し、其の排列はある語で聯合ができないやうにして置いて、之を兒童をして見しめつゝ棒にて指し示すかくして、何回にて覺れたかをためすのである、右の數字の代りに、いろはの假名を用ひてもよろしい、次に右と略ぼ同種類のものにてこの度は書板せないうて、讀んで耳のみで何邊にて覺れるかを檢する、さうして前者との成績の比較研究をするのである、此の方法は米國のクローンと云ふ人の定めたもので、同國にてはこれを体格検査と同様になさせてある、以上話したる如く視覚的記憶に長じて居るものと、聽覺的記憶に長じて居るものとある、従つて訓育の手段にも差異がなければならぬ、聽覺的記憶に長じて居るもの

視覚的記憶
と聽覺的記憶
を區別する
ための
實驗法

のは訓戒即ち語を以てするのが効あるも、視覚的記憶に長じて居るものは、語を用ふる外に教師の様子を用ふることが必要である、現今の教師は此の點につき不注意勝らしく思ふから、今より少しく目に訴へる命令禁止を用ひて訓育してほしいものである、一体一々聽覺に訴へて訓戒するのは教師の威嚴を下ぐる恐があり、又あまり強くありすぎて兒童は恐怖するから、寧ろ視覺に訴へるがよろしい、又視覚的記憶に長じて居るものは作文の如きにありて記事文位はやりやすい、又聽覺的記憶に長じて居る兒童は議論文に長じて居ると云ふ様に、多少其の長所が異つて居ります、

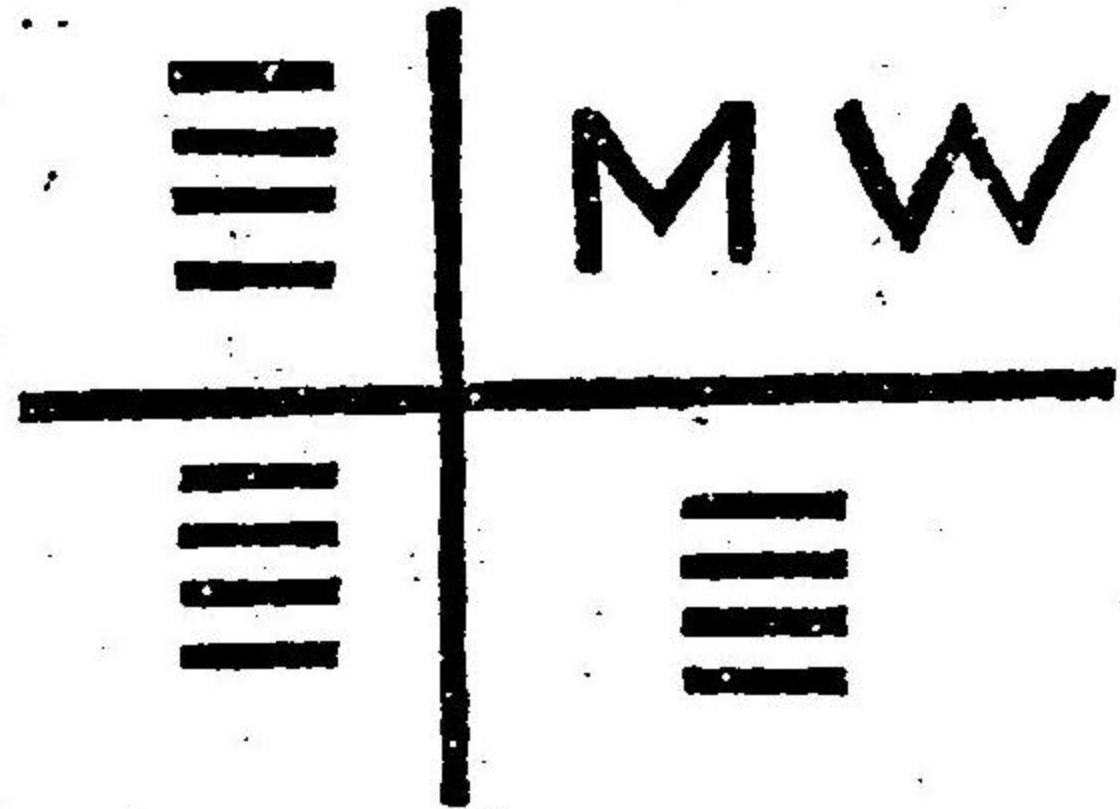
世には記憶術のことを云ふ人もありますが、余は之を必要がないと思ふのである、教育上より云ふと記憶させると云ふ事は古より餘程必要として種々云ふてあるのて寧ろ重んじ過ぎて居るので、却つて活用の方面を忽にする傾向がある、教師たるもの材料の排列をなす時に記憶し易い様に排列することが大切なので記憶術などは決

して重んじないでよからうと思ふのである。

想像

想像

これ迄話しました凡ての心の働らさを云ふて見ると、経験によりて自分の心に取り込むといふことだけで、感覺とか、知覺とか、觀念とか、記憶とか云ふ事は、唯心の内に貯へると云ふ事であつて、未だ経験以外にゆかないから知識の範圍は狭くあります。て経験を本として新らしきものを組み立てないと知識はひろくならぬものである、上圖の如く與へられたる材料を其のまゝ復起するのは記憶であつて、其の材料を利用して新らしきものを組み立てる此の精神作用を想像と考へてよろしい、此の作用は兒童の時盛なるので此れによりて實際に遠きもの迄も工夫するものである、



想像 記憶

以前吾日本では必ず紙折をさせるのに四角形のを與へて居りましたが、この四角形にては緻密な指の働らきが入るから不適當だと思つて、余は之に代へるべく、

三角形の紙を與へた、此れはその結果であつて餘程幼稚園や家庭などでは必要である、想像は工夫力でありますが、教育上に於ても餘程大切であるが新らしき事を發見するにも、道德の上同情心即ち他人の喜びを喜び、悲みを悲むのはつまり此の力の結果であります、非常に慘酷なる行爲を敢てする兒童を訓戒するのに單に道德上の法則を云ふても駄目である、此れは其の善惡に關する事は既に知つて居るが、唯想像力がなくて、同情がないからかゝることを敢てするものである、故に能く想像作用の豊富になる様に工夫書とか、又は折紙とか云ふ種類の仕事を課して行くと自然と慘酷な事をせぬ様に矯正することが出来るものである、併し乍らあまり想像に馳せて確實なる事業を忽にする、知らず／＼の間に虚言を吐くものである、曾て或る兒童は毎日共に通學しよく自家の事を知り居る他の兒童に向つて、虚言を云ふたものがある、兄も居らないのに兄が大學に入つて居る云々と話し、或は吾が家には門前に兵士が立ち番をして居て、室内には如何なるものが飾りてあるなど、云ひ

がかせ、或は日曜日誰々等と何山に遊び何々の面白き事があったなど、さも實らしく語るものがある、そして其の偽りたることがあらはれても別に耻とも知らぬらしいのである、かゝるものは想像より空想に走つた結果で、別に悪意なきものであるから、教育上虚言ではありませぬ、虚言と云ふのは自分又は朋友の利益より起るもので必ず悪意あるものである、であるからかゝる種類の児童には十分に空想に走せるなど訓戒し、猶ほ空想に馳せる暇あらしめざる様にし、決して工夫を用ひしむる如き仕事を課してはならぬ、歴史などにも事實談をする様にし、そして暫く空想に走る仕事を去つて置けば、三ヶ月程も立ては直ります、小供は大人に比して空想に流れて事實に疎いからして、割合に事實を離れたことでも理解するものである、此のことより童話がもてはやされるのである、よりに童話につき話します、

童話

童話は何れの國にても何れの時代にもあるもので、一部分の童話は児童の想像に

訴へて作られてある、猿蟹合戦、桃太郎などはこれに屬します、さて童話は恐らくは餘程昔からあつたに相違ない、併し乍ら日本の現在のものは徳川時代に出來たもので、足利時代のもは餘程現在のものと事實も組み立も異つて居る、併し昔ぢやとばいとあつたと始むるのだけは、昔足利氏以前よりして有つたらしい、故に童話のことを、ぢやばやの話としてあつた、これは誠に早く四方に傳つたもので驚かざるを得ない、これは繪巻物として高貴の人々の間に傳はり、民間には口傳として傳つて居たのである、たとへば小野小町の一代記、後三年の役の繪巻物等は一枚づゝ切り取られて其の話が童話とせられて居た様なもので、それは言文一致で出來て居つた、外國あたりの始めに出來た教科書と譯裁も材料も餘程似て居るものであつた、

童話の根

童話はいくらか教育的者があつた人が作つたもので、或話は佛説を利用し、或るものは歴史上の事實を容易く書きあらはし、或は物語の一節を抜いた様なものもある、からく山、桃太郎は歴史のもの、猿蟹は佛説、舌切雀は物語から抜いた

ものである、或る神道家は神道を民間に傳へる爲めに平易に説いたものであると、凡ての童話を神道より出たりとして居ります、いなのうやぎ 雛廼宇計木と云ふ書にこの事が書いてある。

併し此の童話は或る時代の精神として教育的に出来たものであつて、始めは大人に道徳を通俗的に知らせる爲めのものであつたのを、其の筆法を兒童に向はせたものらしい、即ち道話とか心學とか云ふのが徳川時代に行はれたもので、此れが當時の時代精神であつたもので、これが童話に來たらしいのである、徳川時代には復讐的精神を十分に含んで居る桃太郎の如き勇壯なものは例外で、其の他は皆復讐の意があつて、いかに此の精神を重んじて居つたかは極めて明かなことである、花咲爺の如きは當時の殿様の壓制の有様をあらはして居ります、蜂を劔にたとへ、卵を銃丸にたとへる等當時の武器を代表させたもので、大層戦争の興味を持たせてある、兎に角十分に壓制主義、復讐主義があらはれて居る、明治の文學の上には此れ

童話を教育に應用すべき時期

に代るべきものがないにしても、若もかゝる種類のものを用ふるならば如何に注意すべきかと云ふ事はよく考へねばならぬ、殊に復讐的材料の如き時代精神を異にするものを用ふることについては教育者は餘程考へなければならぬ、學校にては家庭と連絡する點よりいへばかゝる童話を用ふるをよろしとすれども、時代精神と云ふ點から云ふと注意して話さねばならぬ、兎に角あり得べからざる事でも、兒童に喜ばれることは事實なれば、或る人の論ずる如く全く止めるべきものではあるまいが、之を止める時期は教師たるもの、考へねばならぬところである、此の時機は兒童の精神の發達によらねばならぬ、兒童は最初は其の事柄の面白いと云ふだけで大に喜ぶものであるが、其の次には事柄の面白いと云ふ上に事實でなければ好まぬ様になつて來る、更に進むと虚言でも面白く仕組んでさへあれば喜ぶ風になる、そこで童話をやめるには、その事は事實であるか、どうかと云ふ疑問が出る時に止めるがよろしい、滿六歳即ち尋常一學年に於て利口

現今世に
行はるゝ
童話の缺
點

な兒童ははや此の疑を起しますが、まづ一般の兒童は一學年の終りか二學年の第一期位で童話をやめるのがよからうと思ひます、かく兒童精神の發達の時代によりて興味を異にするから其の發達の程度に従つて童話の種類を異にせねばならぬ、現今社會に行れて居る書物につきましてはあまり満足すべからざるものが多い、今これから少しく此の點について述べませう、

- 一、兒童の讀書力につき考へてはない、
- 二、漢字、當字等の用ひ方が多い、殊に學校以外の文字など澤山つかつてある、
- 三、正しき國語を覺知させることが出来ないで、野鄙な語が澤山用ひられてある、
- 四、挿繪は甚だ不注意である、たとへば猿蟹合戦中の挿繪に臼がはらまきをしてあぐらをかき乍ら煙草をくすべて居る、此の繪に於てあぐらと煙草かなければならぬと云ふわけはなからうと考へる、さればかゝる畫を改むることを教育的であると思ふのである、又あまりに密畫はよくないのである、

兒童文學
の要素

要するに現今の童話は教育する者の参考用としてはよろしきも、兒童用としては不適當である、今兒童文學全般につき教育者はいかなる考を持つべきか、凡べて童話を始とし、兒童に話したり、讀ませたり、書き現はさせたりする文學は如何なることを目的とすべきかを定めねばならぬ、唯兒童を喜ばせるだけではよくないので、教育的の目的を有せなければならぬ、たとへば兒童に食物を與ふるにしても、單に喜ばせるだけで食物を與へてはならぬ、必ず兒童の身體に適するものを選ばねばならぬ、兒童文學に於てもやはりその通りで單に喜び満足せしむると云ふだけてなくて、其の精神をよく適當に發達せしむるものが必要である、さて兒童文學は正しき國語を知らしむべき手段として見るべきものである、故に正當なる國語を以て云ひ現はされて居ると云ふ事が大切な要件である、又ここに兒童の知識を開發するとか、道徳上の知識を平易に書き現はされて居るとか云ふ様でなければならぬ、又自ら文學的趣味を解せしめ、想像作用を發達せしむる材料を選ばねばならぬ、さて此

れ等の目的を盡く達しなくとも、是非其の中の二三なりとも達するものでなくてはならぬ、その内にて今日の社會の有様より云ふときは、理科的材料のものは割合に乏しい、これは大層缺點であるから、是非其發達させてほしい、又歴史的事實を取りたるものは修身書にも随分あるが、歴史科に於ける事實と修身科に於ける事實とは充分に區別を立て、ほしい、事實は同一であつても、歴史科では寫眞的でなければならぬ、修身科に於ては繪畫的であつてよろしい、其の實物を思ひ誤らぬ範圍内に於て、理想的に書いてよろしい、即ち西郷隆盛の寫眞ならば一分一厘たりともかはつて居てはならぬが、其の肖像ならば大體を失はない以上は、其の豪傑らしい處をあらはせばよろしいのである。故に修身科にありては理想的に幾分立派な様に話して感情を惹かぬはならぬ例へば二宮尊徳の實傳を取りて話すにも成るべく理想的人物として話さなくてはならぬ、

兒童に説

又話をする場合にもすくない人に話すのと、衆多の人に話すのと其の話し工合が異

話するとき
の注意

なるものである、概して云ふと多少頭をねらす様な話は少數がよくて、多數にはやりにくいが精神を活潑にする壯快な話は多數にはやり易いのである、凡て話と云ふものは興味を興へるに致しましたが、興へ方があまりに十分であると却つて効力が少ない、おかしい様ではあるが、人の感情と云ふものは或る頂點に達すると、それよりは下がるもので非常に興味を興へると小兒はすぐ頂點に達して下り坂になるものである、故に話も餘韻ある様にすることが必要である、即ち興味の八分位でやめると兒童は自分自ら追懐し、感動して其の頂點に達し、精神の上に力を持つものである、教授に於てもかくありたいものである、或る教師は修身教授に於て激しく興奮せしめ感動せしめて成効したなどと思ふて居るのがあるが、これは愈心はできない、成程外見はよろしいが大に兒童の精神を消費せしむるもので、若しもかくつぎ／＼にやられたならば遂に堪へきれなくなるであらう、そして兒童の神経を過敏にせしめて、其の兒童中十中の五六は發熱して一の病的状態をつくるものであるから

甚だ危険なることである。吾々は無やみに感情的に走るのは好まぬ、所謂壯士的の慷慨悲憤は兒童に向つてはよくあるまい吾々は烈い感動を起す修身教授は兒童の精神と身體とに障害を興ふるものとして好まないのである。故になるべく平常の狀態に復歸し易い位の程度を考へねばならぬ、時として偶發事項につきは感動を強くすることも必要とする場合もあれど、通例決して好ましくはないのである、兒童は他人に對する同情を談話中に常にもつものであるが、其の場合に他人の不幸に對してはよくもち易くあるが、其の幸福に對しては持ちにくいものである、不幸や苦痛に對しては同情は自然的に起り易くあるが、幸福につきては起りにくくあるから、此の後者に對する同情を重くみて六と四位にせなければならぬ、島國根性など云ふ、幸福に對する同情を缺いて居る所謂嫉妬心などを醫する爲めには、是非共かくせねばならぬ、かくして度合をたかへて幸福に對する同情を養ふたならば結局國民性即ち島國根性を打破し改良することが出来るであらう。次に話す時に身振り手真似を

少し用ゐてもよろしい、世には之を排斥する人があるが、私はこれは自然語の一つであるから多少はよからうと思ふ、併し野鄙で品性を下す迄にやつてはならぬ、又話の間に圖解や繪畫等を用ゐることは理解を助くるに必要なことである、又同一語を繰り返す事も大切である、いつても繰り返すのは油斷をさせるから常にはいかぬが、特にある注意を喚起する爲には大層必要である、又常に聞かせることにのみ注意せないうて、聞き方態度を知らせることも必要である、これは他の邪魔などして他人の權利を妨げさせぬことから此の權利思想を發達させる機會ともなります、要するに教師としては十分なる話し手でなければ決して大なる教育の効果を奏することは出来ないものと思ふ、西人の語に「よき話し手は兒童社會の王なり」といふのがある。

此れは實に貴き語である、

四、思想及び言語

思想と言語とは何れがさきに發達して來るものかと云ふに昔は種々の説があつた

が、現在にありては思想は必ず言語よりさきに發達するものとなつて居る、併し乍ら言語を覺知させると思想はさつとこれによりて發達するものである、

概念

始まりの兒童の思想を考へるに先だち概念、り話していろく他に及びませう、例へば小兒が今甲乙丙の三つの牽牛花を経験した時其の何れにも通じて居る共通の點がありませう、即ち形とか香とかを認めとして、大凡そ牽牛花はどんなものであるかと云ふ心象を形づくることが出来るものである、即ち甲でもなく、乙でもなく、又丙でもなくて共通の點をとりて牽牛花の一般のものを形づくる、之を牽牛花の概念と云ふのである、これをわかり易く云へば概念は個体に對して起るもので、概念は種々の同類に通ずる大概念とも云ふべきものである、さて兒童は精密なる概念は出来ないものである、なぜなれば兒童は僅の経験に基くからである例へば自分の近傍の家々の主人公が髭があると主人は髭を持つて居るものと思つて居るとか、又學校兒童が其の校の教師が腰辨當なるを見ると、兒童の教師といふ概念の内にはさつと辨

當箱を持つといふことがあるといふわけである、かく兒童の概念は不精密であるから誤り易くあるのである、

さて何時頃兒童の概念が起るかと云ふと、兒童は形容詞を用ゐる様になつて來る時に、此の概念をつくる働きが起つたと見てよろしい、尙わかり易く云へば兒童の概念はまことの概念でなく觀念に近いものである、兒童は自分の経験でつくつた概念は場合によりて新事物に逢ひて舊の概念を改めねばならぬ、此の場合には奇態な念を常に發するものである、

判断

次に判断と云ふ事に就き考へませうが、判断はある二つの關係を決定する心の作用である、感覺と、知覺と、觀念と、概念との内どれでもよろしいが、二つの關係で心象が作らるゝときには判断と云つてよろしい、例へば櫻の花は赤いものである、牛は馬のやうなものでない等の類である、此の判断は早くから出来るが、やはり經驗が少ないから往々まちがつて居るものである、

判断には敘事的判断と豫期的判断とあります、敘事的判断といふのは櫻の花は赤いといふ、今日は雨が降つて居るとかいふやうに事實を示して居るもので、豫期的判断は雨が降るだらう、彼の人は明日死するであらう、などいふのである、児童は始めに敘事的判断に富むもので、だん／＼發達して経験が増して來ると豫期的判断があらはれて來るのである、ところで豫期するといふ事はだういふ所から起つて來るかといふに、或る場合には同様なることを自分の経験によつて豫期すること、或は自分の経験はないが併し乍ら間接に他の場合を考へるとさう豫期することが出来るらしい、たとへば彗星が何處に出るかといふ事は自分は経験はないが、天文學者の言を信じてそれを豫期するといふことがある、今一つの場合は自分の氣に入る事ならば豫期することがある、例へばトをして貰うた時連がわるいといはれた時之を豫期せないで、又更に他のト者に判断を乞ひ、其の時運がよいといふと之を豫期するといふ様なことがある、そこで児童は此の第三の場合の豫期が多いやうであるか

ら、よく失望に陥るものである、故に教育的効果によりて理窟に適ふ様な豫期的に至らしめねばならぬ、

推 理

比 論

推理につきて話さんに、推理とは自分の持つて居る知識によりて、自分の経験しない所のものを取りて推測する作用である、小兒の行ふ推理は比論といふのを行ふものである、これは類似して居る性質のものがあると、一方にある事柄は他の方の事柄にもあると思ふことである、例へば月と地球とに就きて兩者の共に圓く、且つ共に山などがあることから遂に人が地球に棲息するにより、月界にも人が住むと思ふのは比論である、小兒は夏日に自分の近隣の親が避暑するときは他の方の親がなぜ避暑せないかと疑ふのは比論で推測するのである、此の比論はよく間違ひ易いものであるから、児童はよく之を用ゐて非常の誤りをいふ事がある、少し進むと比論によらずして演繹法といふ仕方をやります、之を簡単に説明して見ますれば、一班の場合より個々の場合に推し及ぼしていふ様なやり方でありまして、例へば凡ての物質は

演繹法

歸納法

熱によりて膨脹すといふ事があると、鐵も一つの物質であるからやはり鐵も膨脹するに相違ないといふのである、兒童は其の經驗の狭きに拘はらず、是を以て一般の場合を定めて個々の物を推測するものであつて、けれども知識が進むと誤らざる外に更に歸納法といふのを用ゐます、歸納法は個々の場合より一般の場合を推測するもので、空氣も熱によりて膨脹し、鐵も然ることより、凡ての物質は熱によりて膨脹すると結論するのをいふのである、要するに兒童の推理は始めは比論多く、次に演繹法をやるも經驗が少ないから、よく謬り、又其の知識が進まなければ歸納法を用ゐないものである、次に言語はいかいてあるか、無論最初小兒は言語といふべきものを持たないで、泣き聲あるのみ、生理機關構造の具合で、種々の形をなして種々の音を出す、種々の音を結合して言語となる、兒童は若も今日の普通の社會に置かないで、別の處に置くならば兒童自身の語が出来るものである、これは米國等で屢々實驗の出來たことで、曾て四五人の小供を生れ落ちると共に、一所に置いた所が

言語

彼等の間に自然に一種の言語が出來て相交通するに至つた、そこで學校へ出すことになつてから普通の言葉を用ゐさせたが、彼等のみの寄り集る時にはもとの言葉を用ゐて話したといふ事が、米國の或る報告に出てゝ居ることである、

兒童語

兒童は最初に兒童語を用ゐます、兒童語といふは衣物をへへといひ、手をテテなどいふ様に正しき國語を用ゐる前に先づ兒童語よりするものである、兒童語は發音し易いものである、清音よりも濁音や半濁音が發音し易い、又異なる音のものよりも同音の連続するものは發音し易いもので、此の二つの類の言語は兒童語中に多いのである、又天然の音をそのまま真似て作つて居るものもある、犬をわんわんといひ、猫をにやあくといふが如きこれである、それで言語を覺るといふ側からいふも感投詞は別として、名詞は最も早く覺ゆる、これは必要上から來て居るのである、次に形容詞であつて、動詞は割合に遅いものである、なぜかといふに動詞は手真似や身振でやつてしまふからである、幼稚園の保姆や家庭の教師はあまり氣がきさず

ざると、その下にある兒童は言語の發達は遅いものである、婦人の饒舌るのは兒童の自然の國語の模範たるに適して居るのである、即ち兒童は常に母親の手に育てられて、常に側に居るから天然的兒童の模範としてあるものと見てよろしい、それであるから若き親の下に居る小兒よりも、老婦のよくしやべる人の下に育つ兒童は、其の言語の發達は著しくあります、

又言語は思想發表の手段なるが、もとは運動即ち身振り眞似て發表したものであるらしい、故に生理學上に於ても人体に於ける運動の中樞は言語の中樞よりも早き時代に發達して居たといふ事である、そして兒童の言語の發達の順序と、人類の言語發達の順序とは極めて類似して居るのである、さて兒童の發音は屢々誤つて居るもので殊に下等社會の兒童に於て著しくあります、下等社會は知識が少ないから發達せないものであるが、よく佐行を多行に、誤ります、センセイをチンチイなどいふたり、又良行を發音することも困難であるし、又「ガ」を「ナ」と發音するのもある

淺野長政をナナマサと發音する如き、種々ありますが、幼稚園、小學校の始めなどに於ては誤り易き發音を正すのが必要であります、わけて家庭に於ては言語教授はなかく必要である、又言語の病的状態として吃といふのがある、

五、感情及び情育の方法に就いて

感情と一般に申して居るのは何をさしていふかと申すと吾々の快、不快の經驗をさしていふのである、さうして感情と申しますのは恰も知力と同じ具合に全體の名であるから、必要によりては更に細かに別けて同じ感情の中でもわけて見ることが出来るのであります、其の別け方も一定して居るといふわけでありませぬ、普通心理學と少しく違ふが兒童心理學では三つに別けて置くのが便利であります、即ち一感情（普通心理學にては感情といふと快不快全體をさすも、こゝにいふのはそれと異つて居るので別な語でいふて見ると單純感情とでもいふべきものである）（二情緒）（三情操の三つである

感情の分類

感情

(一)感情は實際上には用ゐるのないう語である、つまり吾々の快不快に最も簡單なる場合を取りて考ふるに吾々が外界からある刺激を受取りし時に、如何なる刺激があつたかを認むるのは知力に屬する、例へば花の色について、赤とか、白とか、紫とかを認むるは知力に屬するが、その刺激を受取るにはある方法があります、即ちその受取り方が快不快の名稱を以て言ひ現はされるのである、感覺機關によりて刺激を受取る時の快又は不快を感ずるものは即ち今こゝにいふ感情である、かく感覺に伴ひて居るもので經驗の中の最も單純なるものだから、之を感覺的感情といつてよろしい、然らば何時でも感覺の生ずるときは快又は不快を感ずるかといへば決してさうではありませぬ、

情緒

(二)情緒、情緒の場合であると感覺的感情に比らばますと一層複雑になつた快不快の感情であるが、其の程度も種々あるから、とにかく感情に比すれば餘程發達したものである、情緒は通常多くの觀念と觀念との關係に伴つて起るといふことを見ても

情操

其の複雑であることがわかる、

(三)情操、情緒と情操とはあまり異ならざるものにて判然區別が立たない、情緒の最も複雑になつた點を情操といふのである、それで情操といふ時には吾々の有する理想といふものが關係をして居る、理想とはわかり易くいへば吾々のある文字を書く時に、よく自分の氣に入る時と、氣に入らぬ時とある、其のまづいと思ふ時は自分の理想に叶つて居らぬので即ち自分の抱ける完全無缺と考へて居る文字の觀念に一致して居ないのである、この觀念が即ち理想である、それで情操の場合には必ず理想によりて快不快を感じます、さうはいふが情緒も既に複雑なもので情操に近いものであるから世には之を區別せない學者もあるのである、さて兒童心理學者に於ても情緒と情操と分つものもあります、小兒はまだ眞正の理想を有せないものであるから、情操のことを道德的感情、美的感情等と言ひ表はして情操の語を用ゐるものがあります、さて此れ等の關係を知らないと普通心理學と、兒童心理學との關

係がわからぬから心理學書を読まるゝ人に對して此の術語に關する注意をなせしに過ぎない、要するに快不快の情は兒童の感情の發達の程度によりて區別することが出来るといふことをことわりして置きます。

兒童の感情の特徴

唯今述べたのは、感情の種類別であつたが、これより兒童の感情は一斑いかなる性質のものであるかを話します、兒童の感情は其の特徴が四つあります、

- 一、利己的である、此れは明かなる事實で、また他人に對する關係を知らぬから動物的である、即ち他人に對する關係でなく自分のみの關係を感ずるのである、
- 二、現在的であること、此れは兒童の有する感情は過去及び將來につきて有すること少なく、現在のことのみより起るものである、
- 三、激烈なること、此れは兒童に於ける神経系統の發達不充分なるを以て、高等中樞の支配力十分に發達せざるにより下等なる中樞を支配せぬから其の感情激烈に起るも抑壓を加へらるゝことが少なくあるからです、

四、繼續時間の短きことである、此れは前と密接な關係があつて、即ち激烈なれば勢力一時に發するから繼續時間は短いのである、

以上は兒童の有する感情の特質であつて大切なものである、次に吾々は兒童の感情を教育すべき必要があるものであることを話させよう、

兒童の感情教育法

兒童の感情の特質を取りて考へて見ますと天然のまゝでありまして、若し其のまゝ放棄して置くならば人類は調和的生活を營むことが出来ない、即ち利己的なることによりて衝突し易いから、他人と調和するやうに導かねばならぬ、これは教育の手段によりて他人を愛するの心を養成する必要がある、四歳より五歳迄の間に至りて始めて幾分か他人と調和することが出来るやうになる、又此の頃に至りて男女によりて其の傾きが違ふ様になるまづ利己的感情が少しづつ、他を愛するといふ傾きを生ずることは四五歳の時に觀察せらるゝから、此の教育は單に學校にのみ依頼するは後れるから感情の教育は家庭教育及び幼稚園教育に於ても十分やらねばならぬ、兒

童の感情は十分に發達して居るときはよき行爲をせないものである、即ち感情は行爲を爲さしむる心をつくつて行く動機となるものである、故に道徳に叶ふやうにする基礎は矢張感情を養成することである、又兒童將來の幸福と密接なる關係を有して居る、即ち感情を缺くと人に嫌はるゝし、又自分で自分の心を慰むることもないものであるから此の教育を忽にしてはならぬ、又中等以上の社會と下等社會と比すれば下等社會の感情は實に粗野甚しいといはねばならぬ、親子の情の如き大切なものであるのに兒童を厄介視するのが多くある、かゝる風が一般に多いから兒童の感情も粗野に流るゝのである、今日新聞紙の三面記事なるものによるとこれらの事は明瞭である、それであるから中等以下の感情の教育は今日よりも一層注意してほしいものである、然るに此の感情教育はよほど困難である、何となれば吾々の取れる感情教育は間接的であるからである、吾々の感情教育を直接にするには情を以て情に訴へる即ち己自ら感じて他を感ぜしめなければいけない、例へば物理學上に於

ける共鳴作用と同じく、此の方の温き感情を以て接すれば兒童の温き情を養ふことが出来るし、又冷かな情を以て接すれば冷かな情を養ふものである、されど實際情を以て情に訴へることは困難であるし、又圓滿なる感情を有する人間は少ないものであるから、到底かゝる教師を得ることは困難である、そこで吾々が多くの場合に取る方法は間接的である、

先づ知力を養ひて之に伴ふ感情を養ふやうにする、即ち如何なる行爲が善なるかを知らしめてこちらの知らせた知識によりて感情を養はんとするものであるが此れは多少の効あるべきも情を以て情に訴へる如く有力ではありませぬ、しかし情は人々によりて異なるは止むを得ないことである、知識にありては一方の考は他のものより正不正を證明することが出来るが、感情は其の正不正を證明することが困難である、朝顔につきていふと、赤を好むものは紫を好むものを屈服させることは出来ないといふ様なものであつて、一方の好みを以て他を導くことは甚だ困難である、されば

兒童が或る嗜好を生じてより、後に之を改めさせようとするのは困難であるから、早くより正しい感情を養ふ様に導かねばならぬ、又情育は兒童の發達の順序を考へて其の程度の異なるに従つて適當の方法を取らねばならぬがこれは餘程困難である、今兒童が石に躓いて仆れて泣くときに方りて、若しも此しきの事は何であるか堪らへよといふとせんに、若し意志の發達したものならそれを愉快と感じて止めますが、未だ意志の發達せないものならますます苦痛を感ずるから、同情を寄せてやれば其の苦みは幾分か減じます、又小兒が泣く時に放棄して置くと泣宛痛みが去つて終には何ぞ泣くのか、自分ながらわからなくなるといふ事がある、又兒童が柱に打つかりて泣く時に母などが其の柱を打ちて慰むるのは兒童の注意を一方へ向はせるといふ點からいへばよいが、此れは封建時代の復讐的精神を養ふ方法であるから、現在ではかゝる場合には母たるものはよろしく兒童の打ちたる部分を撫てながら、御前の痛かつた様に柱も痛くあらうから撫て、やれといつて撫てさせるといふ様な時代

的精神を本としてほしいものである、誠に感情教育は困難であるが教育者の最も注意すべき要件といはねばならぬ、

かく感情教育は困難であるけれども、併し困難に拘はらず之を教育するの必要あるが、この方から考へるのに感情を教育する方法として第一知力を養うて感情に及ぼす方法と、第二情を以て情に及ぼす直接の方法と、第三意志によりて感情に及ぼす方法即ち實際に快不快を経験せしめて情を養ふ方法との三つである、其の他種々あるが皆此の三つの部類に入る、ことが出来る、小學校の眞の感情の教育は、讀書や、話し方の時よりも其の實際の行爲即ち、生徒と生徒との間の關係より行はる、訓育的のものが効力が多くあります、單に知力を主として情を養ふやうにすれば其の結果理窟にのみ走り、口まめな人間を作つてしまふのである、故に訓育上を主として知力上のものが之を助ける様にありたきものである、

次に快不快の表出といふ事を申します、心の方に快又は不快がありました時には之

感情の表出

を外部にあらはすものであるが、殊に小兒は大人と違つて直接に外部にあらはすものである、それなれば顔面は如何なる表出に適するかといふと、第一に笑の適合相を有して居る、先づ其の一として眉毛の尻の方が餘計に發育して中の方は年をとらねば發育しない、眉の中で外部と内部と其の作用が異つて居る、外部は横に出て、内部は上方を向く、ダーツキンはかくなりし理を説明が出来なかつたが、私は動物や小兒につき實驗するに、怒る時には内部の毛がよく使はれ、又喜ぶ時や、楽しい時には外部の毛がよく使はれる、彼の虎の如き猛獸は内部の眉毛がよほど發育して居る、そこで兒童の眉毛の外部の發達して居るのは即ち笑の適合相である、又兒童の頬肉のよほど多いのはまた笑の適合相である、例へば於多福面の如きもよく笑の適合相である、さて大人となるに従つて頬肉が減つて威嚴あるやうになる、婦人は男子と違つて居る例へば男子は鬚髭が生へるも女子はしからずして兒童と同じく笑の適合相である、又皮膚の色の白いのも笑の適合相である、一体皮膚がたるむと黒

いのである、そこで兒童の生理組織は水分があつて皮膚がつっぱつて居るから皺がなないのである、小兒の時には男女共に異なつた點は少ないが、女子は永く小兒の状態を有して居るが男子は小兒と異つて行くのである、婦人は脚が短くて臀肉が澤山ある等も大層子供とよく似て居る點である、或人は婦人をして小兒を養ふ天職を忘れさせない爲めにかく自然が小兒の如くあらしむるのであるといつて居る、其の他毒藥に對する反應でも、自殺等をなす状態等に就いても婦人と小兒とはよく似て居るといふ學者がある、とに角兒童は婦人と同じく笑の適合相を有して居ります、又顔面へ耳も目も鼻も口も集つたのは何か理由があるかといふのに、これは身体を經濟的に組織したもので腦の中樞と近くなつて居ること、恰も縣廳所在地に各官署や著名なる學校が在る様なものである、尙又思想や感情を自由にあらはすことが出来る便宜がある、要するに顔面は人間の看板で、感情表出の役目を持つて居る、さて感情の顔面表出を三部とすれば顔面の中央はあまり役に立たないで、鼻より上部と下部

とはよく役に立つものである。諺に鼻を動めかすなど云ふ語もあれど、實はあまり此の部を使はないもので重もに上部は苦痛をあらはし、下部は喜をあらはすものであるが、兒童は其の下の部分がよほど發達して居ります。

次に快不快の教育上必要なものにつき二三話して置きませう。

恐怖

一、恐怖 此は種々の場合に起つて來るが、其の原因を檢するに大凡四つの場合がある、即ち

恐怖の原因

一、遺傳的原因、二、不合理的原因、三、合理的原因、四、虚弱である。さて遺傳的原因より起る恐怖は理由を説明し難い、例へば馬を見て恐れ、暗所へ行き、恐れると云ふ様なことで、非常に恐れるが其の原因がわからない、或る侯爵の人で非常に猫を恐れる人があつて、たまく或る人の許へ行きし時座に猫が在りしところが、大に恐れて話さへ出來なんださうで、そこへ逃げ歸へられたことがある、或は鼠を恐れ、蛇を恐れたりするのもある、又雞の雛が驚のかけを見て恐れるなど

は遺傳上の理由か何かあるのであらう。

二、の不合理的原因と云ふのは、其の人の迷信によりて恐れるが如きものである、外國にては十三といふ數字を恐れる迷信あり、伊太利の婦人にして此の數字を見て氣絶したと云ふことがある、ある事柄につきて十ばかり恐るべきに二十餘りも恐れると云ふのは此の原因によるのである。

三、合理的原因といふのは小兒が一度洋燈のほやにあたつて暑く感じた事から、次に恐れるといふ所謂經驗より來る恐れである。

四、虚弱にして神經衰弱する時にはとかく外物に對して疑懼するといふのはこの原因によるのである。

教育上より見ると恐怖心を全くなくするを正しいと考へるのは不可と思ふ、若も恐怖心がなくなると粗暴の性質に陥りますから、宜しく合理的原因よりするものは保存せねばならぬ、若しも此の恐れることがなくなつたならば教育上の道具を失ふも

のである、人がやゝもすると恐れがなくなつたらば眞の勇氣を養はれるといふがこれも不可である、恐怖心がないものは一種の病的状態である、吾々が見るのに軍人の子弟に恐怖心がないのがある、これらは粗暴でいけないのである、次に此の反対で恐怖心の烈しいのは憶病である、憶病はたしかによくない、これにはまゝ遺傳によるものがある、今日遺傳といふのは父母の體質によつて兒童の生理組織に及ぼすのを遺傳といふ、精神病につきいふと母の遺傳は女子に行き、父の遺傳は男子に行きます、又兒童の産まる、時の父母の精神状態にも關係します、昔しから支那にては胎教といふことを貴んだが、母が本を讀んだからといふて、兒が腹中で聞くわけではないが、血液の循環に影響を及ぼすからそれが自然的兒童に及ぶのであるから、まことに胎教を重んずるは必要なことである、又虚弱な身体を有すると憶病である、又知識不足であると恐るべからざる事をも恐るゝものである、又家庭の取扱によつても憶病となるもので、嚴格な家庭にあるものは多數の前では話すことが出来ぬ様

憶病

に憶病になるものである、されば憶病なる兒童があつたならば其の原因を探り知りて此の病的状態を矯正すべきものである、

又訓育をなすのに此の恐怖に訴へることの利害はどんなものであるか、これは教育者によりて其の意見が異つて居る、或は少し位訴へればよいといふ説もあり、又全然訴へていけないといふものもあるが、結果に就いて言ふと、巧みに教育すれば訴へるも訴へざるも其結果均しい様であるが、成るならば訴へない方がよろしい様である、何となれば兒童が恐怖心を有すると身体並に精神の勢力を消費するもので、脈膊呼吸が異状を呈して來ます、昔時の試験の時には餘程兒童は恐怖心を生じたもので高等女學校位で檢觸器を用ゐた實驗によると、地理の試験の時に三みりめゝとる位知覺が鈍くなつたのであるから余は成るべく恐怖心を利用すべからずと斷言するのである、

怒

前には恐れについて話したが、この度は怒について話します、怒りも前の恐れの原因

因と同じく四つをあげることが出来るが、こゝに説明せざるもわかるからあげないで、たゞ御話せねばならぬことは怒は普通の人の考へる如く全く除く必要はありません、必ず合理的怒は残こして置く必要がある、兒童の怒は保存せしめ置いて競争の心を起さしむるといふ場合に利用する必要もあります、とにかく怒りは教育上適當に支配し利用するがよからう。

兒童の内には非常に激怒するものがある、これは神経の興奮し易いものには常にあることであるが、あまり愛に過ぐると、かゝる性を持つ様になる、これは兒童の權利以外のことまでも許す結果吾儘となるのである、そして自分の主張を抑へらるゝと怒るものである、故に兒童を其の思ふ儘に育つれば怒り易い性質となります、幼少の時に乳をほしがる時に怒るものである、この場合に大急ぎでやると其の辨がつかまらず、それであるから小兒が怒つて泣くとも、しばらく放棄して置くともとの状態に復するから、やることにしたがよからう、怒りはもしも其の處置を誤ると次第に

増長するものである。

又教育者はよく疴癪持の兒童に出逢ふことがある、此の時に無理に之を抑壓せうとするのは誤つて居ります、彼は病的状態に陥つて居るのであるから、始めには慰撫して平常の状態に復せしめ、然る後是非曲直を明にして再び怒る如きことある勿れと戒むるのがよらしい、即ち成るべく同情を寄せて次第／＼に之を抑へる様にせねばならぬ、家庭教育では命令には必ず服従するといふ習慣をつけねばならぬ、外國にありては幼時より宗教上の支配を受くるが、吾邦はかゝることなし、故に家庭にては親の命に従ひ、不正當なる權利を主張することのないといふ様にして置く必要があります、又進て學校生徒となればよく規律を守らせ國民としては國法を守らせる様にせねばならぬのであります。

好奇心
次に好奇心につき話します、好奇心と申しますのは凡て新らしきものを經驗するのを喜ぶ情であります、つまり此の情は小兒に於ては餘程多い、可にても喜んで持つ

といふ事はこの好奇心である、此の心は知識の發達からいふと餘程役に立つものであるから、教育上大に利用すべき性質のものである。

愛情及同情

愛情及び同情といふものは極めて密接な關係がある、兒童の持つ愛情は出生後二三ヶ月目にあらはれる、母に對する愛情の如きこれである、同情も同様で、まづ兄弟の間に起りまして、兄が叱かれると弟は泣くといふ様なもので早くから起ります、此の情は社會的のものでよほど必要なものである、若も此の情が缺くるならば犯罪をしたり、人を苦しめたりして憚らないから道德教育上必要なものである、一人が欠伸をすると隣りのものもするこれは生理的に起る同情である、關東あたりでもつれ小便といふ事あるが、これも自然的同情である、此の同情は現在の人類には生理的にも具つて居るのであつて、社會的教育の立場からいふとよほど肝要となつて居る、

高等なる感情

高等なる感情即ち情操などに就いての問題即ち美についての感情道理がわかつた時の知的感情、善なることを認めてそれに満足した時の道德的感情など種々あるが、
々々を説くといふを止めて全体にわたりて話させよう、つまり此等の感情は中等教育に關係が多いから、此處には一々説明するに及ばない高等なる感情を有する様になるは青年期である、種々経験を積みて種々の關係を知り、その精神作用の材料を集めてこゝに快不快を感じるものである、

懐疑心

先づ青年期に最初に起るものは懐疑心である、懐疑心は即ち知的感情が常に不満足で物の道理がよくわからぬといふところから起る不快の情である、なぜ青年期に此の心が起るかといふとこれは自然の事情にして、とうど此の期頃迄は唯父母或は教師の教ふるまゝに受取つたのであるが、青年期は自分といふ考が發達して來ては他人の教ふるまゝに受取ることが出來ないで、幾分か批評的の位置に立つ、さうして父母教師又は書籍は一般普通の場合を示すのみで、直ちに實際の場合でない、學問的にいへば抽象的理論で、具体的實際的でないのである、故に是に於て兩者の間に於ける衝突を發見し疑を懐くものである、

又青年は社會を知らぬ、此の社會は複雑なもので情實とか、習慣即ち歴史的關係などが出来て居る、そして青年は自己の收得した知識の一面で考へるから矛盾撞着を見出すものである、又青年はいよいよ社會全般の事を見ると、善なるものは榮に悪なるもの衰へるといふ因果應報の理は現在に於て明かでないから、青年は其の教育上得た所の知識と異つて居ることを見出すから、こゝに其の知識で不満足を感じ、大に疑ふ様になつて来る、そこで如何にもして知的の不完全を去りて、理想の満足を求めやうとする、これは實によき事である、つまり青年が此の疑の時代を通らねば實際の社會に入ることが出来ないの、人間が社會にてする事を定め、人生社會を知る爲めには是非共此の難關を通らしめねばならぬ、例へば器械体操は時として怪愾する危険があつても体育には必要であるし、海水浴も時として溺死するの危険があるけれども、水泳の爲めには必要であるやうに、まことに懷疑は一方から見ると危険ではあるが、一方から見ると人生社會を知るに必要な段階である、

懷疑心の分類

さて懷疑心を三分することが出来る、

(一) 單純なる懷疑、(二) 戲曲的懷疑、(三) 病的懷疑

(一) 單純なる懷疑とは、疑があれば何と解釋をつけやうかと疑つて居る心で、(二) 戲曲的懷疑とは疑常にはれず絶えず心中にて苦悶するをいふのである(三) 病的懷疑とは何物をも一として疑はざるものなきに至るものといふのである、當時喧傳する藤村操の如きは病的に陥れるものである、普通の人は第二の場合までにして第三には至らないのである、さて此の時代を通り過ぐれば人間社會を解釋して自己の收得した學理を實際に應用するやうになるが、若しも此の疑問がはれないと遂には自殺する様の結果に終はるが、もしも此の時代が無事ですむと個人と社會との關係を認むるから道徳的感情を養ふことが出来て、道徳心が進歩するのである、此の青年期に於て高等なる、感情を養ふには家庭並に教師は緻密なる考を要するのである、此の時には獨立心が強くなるから、吾といふ考より他を批評して行くが、此の時首尾能く通

過すればよいが、それが出来ないと自暴自棄となることがある、又此の時に人は不幸の運命に出逢ふもので、或は親を失ひ、又は志を得ないといふ事がある、そこで自暴自棄に陥つてしまふ、であるから此の點は家庭並に教師に於て獎勵が必要であるが、方法を誤ると却つて害があるから十分に注意をせねばならぬ、青年期は必要なる時代であつて高等なる感情を養ふ爲めには大切なるも、一層複雑な關係があるから大なる注意も肝要である、尙又文學上の趣味、美的製作を愛するといふ様な事も皆此の時代に養はねばならぬ、

高等なる感情の發達條件

さて高等なる感情は如何に發達するかを知るには、次に擧ぐることを注意することが肝要である、

- 一、旅行したる土地及び年月
- 二、實際經驗せる山川、海等及び會社、製造所、博物館の類、
- 三、如何なる學校に入りたることあるか、

- 四、如何なる物品を集むることを好むか、
 - 五、曾て己に必要な物品又は裝飾品を製作せることあるか、
 - 六、好む處の學科及び技能は如何、
 - 七、好まざる處の學科及び技能は如何、
 - 八、平常愛讀する處の著書及著者、
 - 九、愛吟する所の詩歌、
 - 一〇、如何なる動植物を愛するか、
 - 一一、如何なる美術を好むか、
- 以上の點につきて青年の取つて居る有様を調べて、其の感情の向ふ所を知り、これによりて高等なる感情を養成することが出来る、そしてかかる場合には讀むべき書物等を指示することも必要である、

六、意志及び意育の方法に就いて、

意志とはある運動を爲さんと欲する心をいふのである、吾々がある動作を爲すには必ず其の動作をせうとする心がある、其の結果から生理的の運動となつて現はれて來るのである、故に或る行爲を爲さんとする心に就いて説明するのは意志についての心理である、それで現今意志に對する學者の考は昔時と異つて來て居る、現今多くの學者の認めて居る説は意志は吾々の知的作用と情的作用と兩者一所になつて出來て居るもので、此の二作用が合して勢力となりて筋肉を運動せしむると動作と云ものになるのである、即ち或る運動を爲すには必ず目的物がある、例へば書物を取らむとする時は其の目的物は書物である、かくあるものを得んとする時には、その得んとするものが目的物である、そこである動作は必ず目的物を何か認めなければならぬ、従つて知の必要があるから、知的考を要するわけであるが、尙又これは果して取つてよいかよろしからざるかといふ事をも決せねばならぬ、これは知的作用のやゝ進んだ場合である、それで唯だ其の目的物を認めればかりては運動は起るも

のでない、必ず其の目的物の價值を定めねばならぬ、即ち其の價值は其の目的物の吾々に與へる快不快の如何によつて定まる、たとへば暑き時に氷を認めるのは知的で、其の氷を見てから其の快を感じ、そこで運動が起る、凡て目的物の價值に就いては感情的のはたらきを有して居つて、知力と感情的のはたらきとの二者が結合して吾々の運動を惹起するものである、古は意志直接の教育説もありしも、今日之を直接にせな^いて知^力の^教育[、]感^情の^教育[、]生^理上^身体^に就^いて^の鍛^錬の^三つ^をな^せは意志教育はすむのである、

さて兒童の爲す所の運動は、兒童の生活の始に於て爲すものと、其の發達した後にするものとは異つて居るもので、最初は目的のなき運動を盛にやります、かく無目的の運動をなす間は身体は餘程よく運動する、そして右の手が動く^と左の手も夫れと同じ運動をするものであつて、赤兒の如きに就いて實見すれば直ぐわかる、これは腦は十分に筋肉を支配することが出來ないから、餘計に筋肉が動くのである、

衝動的運動

かく無目的にしかも乱雑になす運動を衝動的運動といひます、衝動的といふ語は種々の意に使はるゝが兒童心理の方では何の考もなく、生理上身体に勢力が澤山あると、自然に身体力が筋肉にあらはれて運動をするといふのである、此はごく兒童の始めにやつて居る不規則の運動である、又反對運動といふのは塵埃が飛び來れば目をしはたゝいて避けるとか、光線が來ると瞳孔を小さくするとか、刺激に應じて自然にやる運動を反射的運動といひます、これは大人にもあるが小兒は此の運動を持つて居るが、これは自然的保護の必要上よりかくあるのである、

反對的運動

本能的運動

又本能的運動といふものがある、本能とは遺傳されたる習慣をいふのであります、即ち人類の生活に取りて極めて必要なる行爲は遺傳されて本能となるのである、例へば口のめぐりに乳房が來るとすぐ吸ふといふのは、教へられずして知つて居るといふ様に、凡て極めて必要なる行爲は遺傳されて居るものである、そこで精神が發達すると自分の望でもつて行爲をする様になる、かくなると本能でないのである、

つまり本能的運動は知らずくの間遺傳されて來るもので、人間に取りては、大關係ある運動にして小兒自身の爲め、人類一般の爲め、生活に適する所のもので本人自身は生活に適ふや否やは敢て自覺せざる運動である、
以上は精神發達せざる時の運動であるが、自ら進んでやる運動の中にも多く心を勞するものと、勞せざるものとの區別がある、之を次の三つに別けます

- (一) 感覺的運動
- (二) 模倣的運動
- (三) 思慮的運動

感覺的運動

右のわけ方は普通心理學の分類とは異なるも便利である、感覺的運動は或る物体に就いて感覺が起つてから起す運動である、たとへば赤きものと認めて之を取らむとするが如き運動をいふのである、

模倣的運動

模倣的運動は他人のやつたのを見て、自分もやらうとする運動である、技術教科の如き、或は口の動かし方を真似るが如きものである、

思慮的運動

思慮的運動は自分で十分に思慮をめぐらして價值があるか、正當であるかと認め

後に運動するので、畢竟思慮的運動をなす様になるには精神の發達した後でなければ出来ないのである。

習・慣

或る運動を屢々繰り返せばやり易くなる、始めには大層精神を勞した事も數回繰り返すとあまり勞せずして出来る、習字や樂器は始めには非常に精神を使ふが、熟練するとあまり精神を使はないで出来ます、かく反覆の結果易く出来る様になつて來ると習慣が出来たといひます、習慣は即ち反覆の結果である、さて人間の習慣には種々あります、朝起とか、規則正しい運動とか、喫烟とか、其の他様々の習慣はつゝものである、故に小兒の時から澤山の習慣がついて種々の行をするものである、

品性

さて人間は澤山の習慣が集りて其の心が出來て、其の人物の傾向が定まる者である、かかる場合には其の人の品性と申します、品性とは自分の意志を用ゐて習慣を作り、其の習慣が集りて其の人の傾向が出來たものをいふのである、品性を養ふには習慣に注意せねばならぬ、習慣をよくするには一つの運動と雖も不注意に過ごしてはな

頑固

らぬ、又意志が時とすると幾分か不完全に發達する場合がある、頑固などは意志の不完全なのである、これは人間の確乎として居るといふのは異つて居るので、理窟に合はないでも自己の主張をまげぬものをいふのである、かく頑固なるものは兒童の時に愛に過ぎた結果か、又は生理的狀態の不完全、たとへば胃病などから起るものである、それで學校等に於て頑固なる兒童に逢へば其の原因をよく探り、其の原因に従つて適當なる方法を取らねばならぬ、要するに頑固な兒童は抑ゆるのは不可である、大に其の兒童に同情を寄せて之を愛しつゝ知らず／＼の内に其の癖を矯正する様に導くことが必要であります。

甲

又意志の缺損よりして他と争ふことを好む場合がある、即ち衝突を好むといふ悪い習慣がある、此等の悪意志は大抵家庭で作られる、即ち愛に過ぎた結果吾儘から起るのである、之を矯正するには遊戯の中良友の感化を受けしむることが必要である、遊戯をなして性質のよい子供と遊ぶので其の間に感化を受けて、知らず／＼の中に

意志の激

矯正が出来る、かくの如く遊戯は訓育の手段として大に効力があります、又意志の缺損する結果として意志の激烈なるものがあります、即ち直ちに人を打ち、人を蹴りなどする動物的のものがある、若しかゝる兒童に對して教師が反抗すると益々其の度を増すものである、けれどもこれは矯正すれば望みがある、教育上よりいへば教師はかゝる兒童には反抗をやめしめやうとすると却て火中に油をそゞぐ様なるものにて其度を強める故に充分に同情を寄せて其の信用を得、知らず識らずの中に教師の考中に入れしむることが必要である、要するに急に矯正せんとするは誤りである、

意志の薄

又意志の缺損から決斷力に乏しいもの、即ち意志薄弱といふのがあつて、これは如何なる所より起るかといふと、つまり思想の勢力が弱いのである、故に之を矯正せんには大に知力を貯へしめねばならぬ、其の人は此の事はよいかわるいかといふ事に就いて考はあつても思想の勢力が弱いかからかくなるのである、故に充分其の注意作

氣質

用を養ふて知力を強めねばならぬ、要するに決斷力なきものには其の知力が充分の作用をする様に導かねばならぬ、習慣品性に關して氣質のことを一言せん、人の氣質は見分け難いもので、書物などに書いてある様にさつしりとあてはまるものでありません、大体二つ位を兼有して居るものと見ねばならぬ、又ごく應用の廣いものでもありません、種々新たな説もあるが、それは普通心理學に譲りて兒童について如何にわけるかを話さう、

多血質

從來の普通分類によると多血質、膽汁質、粘液質、神經質の四つにわくるのである、多血質はよく騒ぐ様な快活なるもので、面白い小兒なれども、忍耐がなく、同一のことを承くせない、他人との應接を巧みにするも、學科は出来ない、心はかはり易く、すぐ一つの事より他の事へうつる、これは叱るとますます反對な事をするもので、この類の兒童は學問の發達はあまりせないものである、

膽汁質

膽汁質、体格よくして、腕力あり、忍耐力ありて剛膽なり、よく教師に反抗し、且教師の缺點を見つけることも甘い、そしてあたから理窟に適はぬなどいふこととはない、たとへば衣物について注意すると、すぐ教師の服装について穴をさすといふ様に、随分處置しにくいが將來大に望みがありました、概して名譽心ありて勇氣に富んで居ります、

粘液質

粘液質、身体は丈夫で怒りたいことでも、心にとめて居る風であつて、何か考があつてもすぐあらはさず、冷淡に過ぎる、俗にいふ御人よしは重もに此の性質に屬して居る、人が打つことがあつても黙して居るし、教授の時間にも不注意であまり熱心でありませぬ、

神經質

神經質、瘠せて居て脊の高きものが多い、青白い血色で、何事にも用心深く、心配する傾きがある、故にあまり忘れ物をしたり、遅刻したりせぬ、やゝもすると沈鬱である、他と共にせずして獨り離れて居て音楽などをやつて居る、此の性質のも

のはあまり強くいふと聞きすぎて害があります、

餘程極端な場合には此の一に入るものもあれど、大抵はいろいろ交じつて居ります、さて學校では成るべく同一の氣質の兒童を同じ所に置かないで、相互に中和させることが必要である、かくして圓滿なる人間を作ることゝ怠つてはならぬ、

さうして何れの氣質をも完全に具備して其の事其時といふ様に場合に適合する様に圓滿なる人物を作ることが大事である、然るに従來は其氣質といふものは、身体の狀態で教育の關係する所でないといつて居たのであるが、今日にありては其の境遇上若くは教育上の關係が甚だ大なるものであるから、此の點に向つて注意して貰ひたいものである、私の講義は畧ぼこれて終りましたが、單に糸口を申上げた位なものでありますから、これを本として皆さんは研究をすゝめて下さい、なほ將來參考書とすべしは、

結語

參考書

松本孝次郎講述 普通兒童心理學

本論 氣質

一二四

同 實際的兒童學

松本孝次郎合譯 トレシー氏兒童心理學

高島平三郎 幼兒心理學

津田玄徳氏著 サレー氏兒童心理學

黒田定治氏解説 コンベレノ氏兒童心理學

篠田利英氏解説

是非一度讀んで下さい尙進んで普通心理學の研究をもなされんことを望みます。

兒童心理學講義 終

明治三十八年七月十七日印刷
明治三十八年七月二十日發行

定價金五拾五錢

著者兼發行者 松本孝次郎
東京市牛込區矢來町三番地山里百五號

印刷者 三島宇一郎
東京市神田區表神保町二番地

印刷所 弘文堂
東京市神田區表神保町二番地

不許複製

發兌 東京市牛込區矢來町三番地山里百〇四號 女子修養會

女子修養會發行

月刊 家事と裁縫

第壹卷第五號既刊

定價金七錢
郵稅五厘

本誌は家庭及び受験者にとりての良好なる参考となるのみならず女子修養上にも少なからざる便宜を興ふるものなり特に兒童の教養に志さす者は一讀するを要す

東京市牛込區矢來町三番地

山里百〇四號

發行所

女子修養會

女子修養會編纂

家事及裁縫科受験便覽

六月八日發行

壹部

金貳拾錢

郵税金貳錢

郵券代用(五厘切手)貳割増の事

目次

- 家事科檢定試験問題集
- 裁縫科檢定試験問題集
- 高等女學校家事及裁縫問題集
- 受験規則及手續
- 受験の心得、答案の書き方
- 研究をなし又は檢定を受けるに必要な参考書類
- 研究の方法

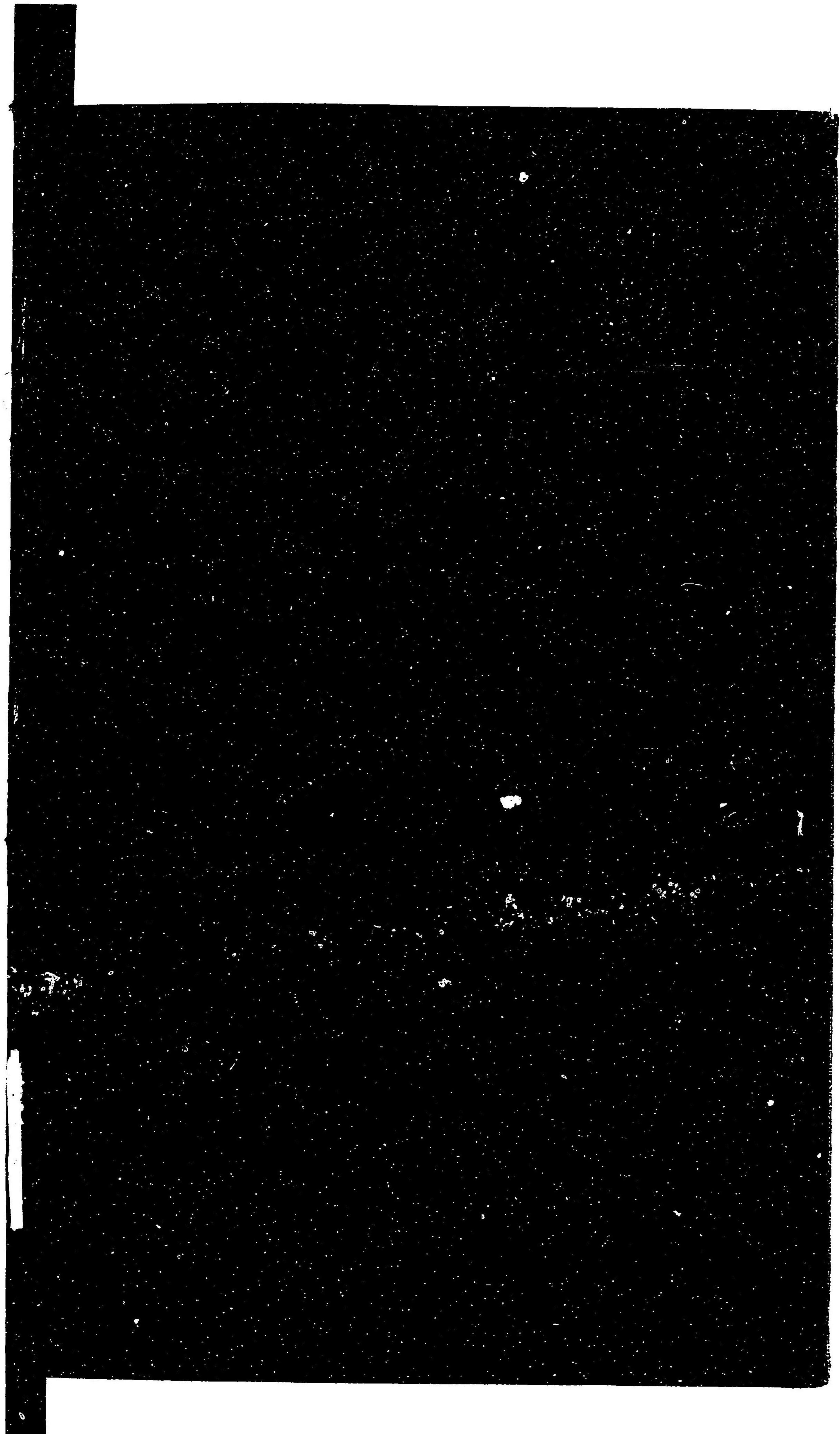
本書は家事及裁縫科を學ぶ者及び試験を受ける者の爲に必要な事項を網羅せり

發行所

東京市牛込區矢來町
三番地山里百〇四號

女子修養會事務所

252
21



252.5
21

046104-000-8

252.5-2

兒童心理学講義

松本 孝次郎/著

M38

BEB-0046



